

## (一) 山羊

もの好きな夫婦が山羊（やぎ）を飼いだした。

とある田舎の、とはいえ新興住宅地の一角である。発端は同居しているじい様の一言だった。

「ヤギはよく草を食うぞ。何の草でも食うぞ」

新興住宅地と名がついてはいるものの、200を少し上回る区画の中で、住んでいるのは80軒あまり。3分の2は空き地である。30年前の売り出し当時の買い手の多くは東京におり、投資目的だったのか購入以来一度も来ないのがザラで、草茫々（ぼうぼう）どころか、篠竹（しのだけ）がビッシリと密生したり、大木が生えたりしているところまである。隣家との間に距離があるのは精神衛生上きわめてよろしいが、藪（やぶ）から蚊がおしよせて来るのはきわめてよろしくない。

夫婦は汗を拭きふき草を刈る。が、夏草の茂る速度は凄まじい。刈ってもすぐまた伸びる。萱（かや）の上に葛（くず）が伸び、背丈を優に越す。夫婦は隣の地主を調べ、手紙を出した。返事は来ない。たまりかねているところに「ヤギは草を食うぞ」であった。女房はそれを聞いて笑いころげただけだったが、生き物の好きな亭主は目を輝かせた。

「飼ってみたいねえ」

「え？ マジ??？」

どこで今時山羊が手に入るか。

ペットショップでは売ってはいまい。

高校生の長男によると、同級生の農家の広い庭の端に山羊が1匹いるらしいが、思春期かつ反抗期まっただ中とあっては、「そこで俺の名前を出して聞くような恥ずかしいマネはまちがってもしてくれるな」と目を三角にする。

首をひねったあげく、夫婦は農協に行って聞いてみた。今では日本語でもJAと  
いうのか。受付のおねえちゃんは吹き出しそうな表情を必死で隠して行儀よく目だけで笑い、畜産課にまわした。後で笑いころげたに違いない。電話をとった中年男

性は「ははあ、ウチで扱ってはいませんが、飼っているところを知ってます。紹介してあげましょう」。

夫婦して見学に行ってみると、牛小屋の隣で真っ白い山羊が5匹、牛の配合飼料を食べていた。雑種で1匹3万円、血統書つきで10万円と言う。「雄（おす）は凶暴になることがあるから雌（めす）のほうがいいでしょうねえ。野犬に襲われると困りますから檻（おり）が要りますよ。屋根がついて、中で歩き回れるくらいの。それから寝床にする藁（わら）も用意してくださいね」

さっそく大型犬用の背の高いおりを買って組み立てた日はカンカン照りで、浴びるほど水を飲んでも夫婦はふたりして熱中症になりかけた。わらも知り合いの農家に話をして分けてもらい、パイプに防水布を張った小屋を新しく買ってその中に入る。

届いた山羊はすでに生後5カ月になっていた。

「生まれて初めて親と離れましたから、今夜は鳴くかもしれませんよ」

牛の配合飼料を荷台から下ろし、ねじり鉢巻をした親切な農協の係長は、そう言ってトラックで去っていった。山羊は中型犬ほどの大きさはあるが、狭い檻の中でつながれて育ったせいか、足が細くいかにも華奢（きゃしゃ）である。

「まさか1週間で死にはしないよね」。夫婦は顔を見合わせた。

それからひと月近く、細（ほそ）っこい山羊がちゃんと生きのびたのはいいが、鳴くというものではない。ヤギというのはこんなに鳴くのか。こんなに声がでかいのか。

草を食べることだけはまちがいなく、杭（くい）の周り3メートルほどはきれいに草がなくなるが、日に3時間ほどはけたたましい声で鳴き続ける。英語ではパーと鳴くというのだが、確かにメエメエなんてカワイイものではなく、のどを震わせベエベエと叫ぶ。畑でできた胡瓜（きゅうり）を10本ほど持って近所の家に謝りに行くと、「声帯を、ピッ、って切ったら」とその亭主に不機嫌な顔で言われ、女房は身を縮めて何度も頭を下げる。

つながれてばかりでは可哀そうだと散歩に連れ出すと、通りすがりの人が「えっ、

犬にしては変だと思ったら角（つの）がある。え、ヤギだよ」と自転車から身をのりだして、落ちこちかねないほど振り返って見ていくのはいいのだが、この山羊、あっちの雑草を食べ、こっちの落ち葉を食べ、帰らない。綱を引っ張られると、2つに割れた蹄（ひづめ）を踏ん張って抵抗する。果ては前足を折り曲げ、道路の真ん中に坐りこむ。たまりかねた女房が抱いて歩き出すと、伸びかけの角を引っ掛けられる。雌山羊は角がないはずじゃなかったのか、と女房はいぶかる。「雑種ですからねえ」と言われはしたが。

どうも小屋育ちは、屋間でも青天井の下はだだっ広くて不安らしい、と女房が気がついたのはしばらくたってからである。小屋に入っているほうがおとなしい。

わからないものだ。

犬じゃあるまいし、と散歩を中止されてもこの山羊は文句は言わなかった。夫婦がイタリアに住んでいたころ、アルプスの山にハイキングに行くと、牛に混じって、日本のものより一回り骨組みの大きな山羊が何匹か草原に放牧されており、うちの1匹が長い山羊ひげを突き出し肩をいからせ、堂々と人間の散策道をふさいで立っていた。その記憶から歩かせねば、と思ったのだが、誤解だったらしい。

ひと月ほどすると新居にも慣れ、山羊は静かになった。

もの好きな亭主は、畑の大きくなりすぎた胡瓜を山羊にやってみる。食べる。

堅くなった茄子（なすび）にオクラ、大根、ピーマン、生のじゃが芋、みな食べる。甘いトマトや熟柿（じゅくし）ときたら大好きである。赤い汁で口の端が紅をさしたようになる。

「ゴーヤは？」

苦いのに辟易（へきえき）した中学生の次男が問うた。

亭主がさしだすと、興味津々（しんしん）で家族が見守る中、山羊はボリボリと半分まで食べ、そして表情は変わらず黙ったまま、それ以上口を開けなくなった。味はわかるらしい。

今では山羊が家の周りの草をおおかた食べつくしてしまった。平らでスッキリ



気持ちがいい。家にいる女房は、暇があれば日に 2 時間ほど、麦わら帽と椅子と本を持ち、山羊の鎖を引いて外に出る。団地に山ほど残っているよその空き地の草を山羊に食べさせながら、女房は骨粗しょう症予防用に日光を浴びて本を読む。

陽（ひ）の光に薄（すすき）の穂が揺れ、平和な秋の日である。

## (二) 山羊の発情

山羊、goat を英和辞書でひくと、「淫乱と好色の象徴、悪魔は山羊の足をしているとも言われる」とある。なんでまた？

11月のある朝、白いから「雪」と名づけられた山羊が、夜明けとともにけたたましく鳴き始めた。ふだんなら時々メエエとかクウウとか言うほかは、女房が忙しくて草場に連れて行ってもらえず、ほったらかされて腹が減った午後にしか鳴かないのであるが。

ひょっとして、ともの好きな女房がかがんで山羊の尻を覗（のぞ）いてみると、尻尾（しっぽ）の下の逆三角形のピンク色の粘膜らしい部分の、ウンチがぽろぽろと出てくるところのすぐ下が、ふだんより赤みが強くなり、少し盛り上がっている。

ついに来たか。

発情期である。たぶんこの秋には種がつけられるよ、とは聞いていた。

が、これほどやかましいとは。

山羊は鳴き続ける。声がでかい。尋常なデカさではない。近所迷惑を思い、女房は胃が痛くなってきた。買った時の農家に電話をしてみると

「あ、きましたか。発情ですねえ。24時間続きます」

女房はショックで椅子から転げ落ちそうになった。

「え。24時間！」

「そうです。してこれからねえ、そうねえ、3月くらいまで、3週間おきに、何度もきますから」

女房はめまいがして卒倒するかと思った。買う時に念を入れて、何か気をつけることはないかと聞いたのに、どうしてその時言ってくれなかった！

「種つけるならねえ、わたしのところさ雄山羊いますから、ちょっとまだ幼いんだけど、発情さきてる雌が傍いっと、その気さなると思うから、連れてきてくださいよ。じゃわたしは今日は医者行かなきゃならないもんで、失礼しますよ」

ツーツーと切れた受話器を手に、口をポカンと開けたまま女房はしばらく動けな

かった。

山羊はただ事ではない声で鳴き続ける。このままでは山羊を連れて夜逃げでもせねばならない。

女房は必死で考えた。

人間なら避妊薬がある。いわゆるピル。毎日のめば、生理、つまり排卵がない。つまりたぶん、発情しない。いや、人間の場合は1年中発情しているようなものだから、ちょっと話が違うが、もし、山羊にもそういうホルモン剤があれば、発情を抑えられる筈である。あるいは、犬や猫のように、子宮と卵巣を取ってしまえば、避妊でき、そして発情も来なくなる。

どの医者がやってくれるか。

まずは、以前猫を連れて行ったこぎれいな動物病院に電話をかけてみた。山羊は診(み)ない、とすげなく言ったが、別の、豚を主に診るといふ獣医を紹介してくれた。茨城は農業県である。ローズポークというブランド豚があるくらいだ。電話には留守番のばあ様が出、昼に獣医が往診から帰ってくると言う。

誠実そうな獣医は、山羊の発情抑制の手段など「どうしたらいいんでしょうねえ、わたしにはわかりません。山羊の避妊手術はわたしはやったことがないからやりません」と言い、県の畜産センターに聞いてみろと勧めた。

県の獣医も怪訝(けげん)そうであった。山羊はフツー仔を産ませ乳を出させるために飼う。よって発情の来ない雌に発情させるためのホルモン剤はあっても、発情を抑えるようなホルモン剤は「ない」と断言する。

「わたしは近所迷惑で朝から胃が痛いんです。何かいい手はないでしょうか？」

「いったいお宅は何をしてる家ですか」

「何って、サラリーマンの家ですけど」

「農家じゃないんですか!？」

「農家じゃないんです!!! 空き地の草を食べて欲しくて飼い始めて、草はとてもよく食べてくれるんで助かってるんですけど、団地なもんでやかましいのは困るんです！」

女房の声はほとんど悲鳴である。

「ははあ、牛はねえ、発情が来てもそんなに鳴いたりしないんですけど、山羊は鳴くんです！」

獣医はなぜかとても嬉しそうだった。

女房はちっとも嬉しくない。

「どうしても鳴かれたら困るなら、種つけして妊娠させたらいいですよ。もう発情がこなくなりますから」

「仔山羊を産ませるんですか？」

「そうです。乳もとれますよ」

ハテ。

仔山羊を産ませるとなると、話がまるで違ってくる。もの好きな上に無鉄砲で、ろくに考えもしないうちに頭から飛びこむのが得意な女房ではあるが、さすがにひとりでは決めかねた。だいたい山羊を飼いたいと言い始めたのは、もの好きで動物好きだが、女房よりは常識人の亭主である。

が、現在アメリカ出張中。

### (三) 犬登場

山羊が小用をたす時には、小腰をかがめてほんの少し力む。その格好を見ると、女房は母親の話を思い出す。昔、大正生まれの母親が小さかったころ、ばあ様どもは田舎道の脇で着物の裾をまくって小腰をかがめ、ちょいと足を開いて、後ろにとばしていたような。戦前は女も立ちションをしていたのである。

で、「大」のほうは、山羊はまるで力まない。草を食べ食べ、尻尾をヒュイイと持ち上げたかと思うと姿勢はそのまま、干し納豆のような黒いウンチをポロポロと草の上に落とす。原料はオール植物性なので、肉食・雑食の犬猫のウンチと比べ、格段に臭くない。

ただ、食べながらいっぽうで出しているのは、どう見ても利口そうにない。

山羊の番をしている女房が首をひねっていると、近所の女房が「動物はみんなオシッコとウンチは別々にするのに、人間だけ一緒にするんだってねえ」とのたまう。

「あらそうなの」

「そうなんだってよ。でも、日本人だけなんだって。外国の人はみんな別々にするんだって」

そんなバカな！

山羊を飼い始めたもの好きな夫婦の家には、子どもが4人と女房の父親、それに猫が2匹いた。生粋の「猫派」なのである。一番上の男の子が高校卒業と同時に家を出て、7人家族がひとり減り、「だから俺の代わりに山羊を飼い始めたんだろ」とその子がしたり顔で言うが、それはちょっと違う。

山羊は犬や猫を相手にしなかった。大きさが違う。近所の犬が散歩のついでに近寄ってきても、たいていの犬と比べると山羊のほうがデカイ。「なんだこのチビ」と見下ろして悠然としていた。が、敵意をあらわに走り寄る雄の野良犬の場合は嫌がって逃げた。肉食動物と、その獲物になりかねない草食動物との関係が歴然としていたのである。

いっぽう元からいた猫は、でかい新米を徹底的に拒否した。亭主が猫を抱いて近



づくつと、ひっかいてでも逃げる。が、数週間たつと、しだいに近寄ってくるようになった。少し離れ、じつと警戒態勢で、観（み）ている。英語では、好奇心は猫をも殺す、と諺（ことわざ）にあるほどである。興味はあるのだ。

山羊が草を食べに出ている時を見計らって、猫は檻に入った。好奇心丸出しにしてあちこち嗅ぎながら、歩いて回る。そこへ山羊が帰ってきた。山羊は自宅へ帰ってきただけの自然体だが、猫はパニックにおちいった。疾走する。が、すぐに檻の金網にぶつかる。

落ちる。走る。跳び上がる。ぶつかる。落ちる。

なんとか出口を見つけるまで、五度ほど激突を繰り返した。

そこへ新たに犬が登場した。

もう成犬である。3歳という噂だった。名前はジョン。近所にある元の飼い主の家の庭は広く、4区画分で200坪はあったろう。金網の塀をめぐらせて門が閉め切られた中を、雑種の柴犬は自由自在に走り回っていた。散歩には遠く川土手まで連れて行ってもらう。大嫌いな雷がゴロゴロと鳴れば、犬は飼い主のばあ様の寝床に飛びこんだ。恵まれた環境にいたのである。ところが事情があって飼い主がアパートに引っ越すハメになると、シレッと犬は置き去りにされた。

犬が野良になって10日ほど過ぎ、ちょうど暇に任せて自治会の会長をしていた女房のところへは、どうにかしろと犬の隣人から電話がかかってくる。

動物好きの亭主が見かねて「可哀そうだよ。飼おう」。

もの好きはもの好きだが、それほど生き物に興味のない女房は顔をしかめた。毎日散歩に連れて行くことになるのは誰だ。

犬好きの知人いわく、「犬も種類と大きさによって必要な運動量が違ってくるんだよ。今流行（はやり）のチワワなんて1日15分も歩けば上等、中型の柴犬で1時間くらい。でもドーベルマン・シェパードなんかの大型犬は自転車と一緒に走ってるの見るだろ、あれで1時間×2だよ」

とんでもない。

が、世話になったこのばあ様への恩返しへの念はあり、野良犬をほうっておくわけにもいかず、生活情報誌に広告を出して貰い手があるまで、という条件で、女房は

腹をくくった。

ジョンはすなおに夫婦の買ってきた首輪につながれた。散歩に行くのにもおとなしい。

問題は山羊だった。

互いにやきもちを焼くのである。

山羊は空き地の草を食べさせる目的で飼ってあるので、昼は檻から出して杭になぐ。その時に犬が猛烈に吠える。自分も連れ出せと要求するのだ。さらに、犬にとっては自分が唯一無二の可愛がられる存在である筈なのに、目の前で飼い主が今まで見たこともない妙な動物の世話をやくのが我慢できない。あるいは獲物と思っているのかもしれない。山羊は山羊で、女房が犬を散歩に連れて行く間じゅう、あたしも連れてってよメエメエと鳴き続ける。

やかましい。

犬を飼ったことのない女房は、犬のしつけ方を知らない。幸か不幸か人より声が大きく、子どもを怒鳴りつける勢いで叱るが、犬の吠（ほ）え声のほうがさらにデカイ。頭をひっぱたかれると、犬は口を開けて咬もうとする。

なんでわたしがこんなことを、と女房は腹が立つやら情けないやらで泣きたくなった。叫んでいると、犬と山羊と人間の三重唱である。もっとやかましい。

生活情報誌を見て、犬が欲しいという家族が見に来た。気に入って飼ってくれると言う。が、柴犬は頑として車に乗らない。どうにかこうにかなだめすかして乗せ、ああこれなら、と思った瞬間野良犬が通りかかり、ジョンは飛び出して吠え始めた。追いかけた亭主は指をひどく咬まれる始末である。

車に乗らないじゃダメだよ。

亭主が血まみれのジンジンする指を押さえ、ため息をつく。

女房は諦（あきら）めない。

車が嫌いなのは、今まで車に乗ったことがないからだ。前の飼い主は車の運転をしなかった。車に乗せる訓練をしよう。

あくる朝、ふだん散歩へ出かける格好で、女房は犬を車のところへ連れて行った。

バックドアをはねあげて誘うが、犬は嫌がる。抱きあげると咬みつこうとする。犬のことはわからないなりに女房は、持久戦の覚悟で自分が車の後ろに座った。犬も地面に座る。

15分たった。

さあお散歩に行こうよ、いいお天気だねえ、と機嫌をとるが、いっこうにお犬様はその気にならない。そこへ向かいのオシャレなばあ様が出てきた。

あら、何してんの。

わけを聞くと、ばあ様は犬の目を見て、あんた、ここ乗んなさい、と言って車の床を叩き、犬はすぐにとび乗った。

なんだこれは。

すかさず車のドアを閉めながら、女房はへそをまげた。毎日餌をやり散歩に連れて行っているわたしの言うことをきかずに、どうしてあのばあ様の言うことをきくのだこの犬は！

犬になめられるのは腹が立つ。が、川土手の道は景色が開けて気持ちがいい。しつかり20分も歩き、さあ帰ろう。

が、やっぱり犬は車に乗らない。また15分。

やれやれ、やっと乗った。

山羊の相手も疲れるが犬も疲れる。女房は昼間からフテ寝をした。

生活情報誌を見て犬を飼おうとやって来たふたり目の主は、40キロ離れた町に住む年配の夫婦だった。その顔を見るなり犬はすぐに腹を見せて寝転び、よろしくと言ったもので、夫婦は喜んだ。女房はおもしろくない。現在の飼い主である女房に、ジョンがこの服従恭順ポーズをとったことはないのだ。

が、この憎たらしい、やかましい犬を貰ってくれるものなら、飼い主の沽券（こけん）も何も、ものではない。軽トラックの運転席という狭い場所にも、ばあ様に抱かれると犬は何の抵抗もせず乗った。

軽トラが遠ざかり角を曲がっていくのを見送りながら、厄介払いした安堵で、女房は体中の力が抜けていくのを感じていた。

#### (四) 猫の狩り

少し前の話である。

日本で生まれ、もの好きな家族と一緒に飛行機でイタリアに行って4年半して帰ってきた猫のトラは、狩りが上手だった。ミラノ郊外の庭で、メルロという黒い美声の鳥を何羽捕ったことだろう。

それを聞いた向かいのフィンランド人が、ある日女房のところへ来て、猫をちょいと貸してくれないかと言う。車庫に50センチほどの巨大鼠（ねずみ）が出て、驚いた掃除の女性が金切り声をあげて天井まで飛び上がり、えらい勢いで車庫の戸を閉めてから、「あたしゃあのネズミがいる限り二度と車庫には入りませんからね、奥様」と息をはずませ蒼い顔で断言した、と言うのである。

「あら、いいわよ、お役に立てるといいけど」と、寝ていたトラが迷惑気な顔をするのもかまわず女房は抱え上げ、向かいの家の車庫へ入れて戸を閉めた。

30分後。

そうっと戸を開けてみると、なにやらキィキィ音がする。トラはちゃんと鼠を口にくわえていた。

お利口、お利口。

その鼠はこっちにちょうだいね。

まさか鼠が猫より大きい筈はなく、5センチほどの鼠は同じくらいの長さのシッポをぶら下げてキィキィ鳴いている。

「まあ、可愛い」

当時5歳だった下の娘が鼠を掌に載せ、小さな指でいとおしそうに撫でたので、清潔好きのフィンランド人はヒクヒクと頬をひきつらせた。

と、鼠は娘の指に咬（か）みついた。細長く鋭い歯である。

もの好きな夫婦のもの好きな娘もあわてて鼠を振り落とし、手を消毒してもらった。

あれから7年、猫は代替わりして2匹になったが、2匹のうちイタリア語で牛乳

を意味するラッテと名づけられた猫は狩人である。次から次へと捕まえてくる鼠が1種類でない。濃い灰色か茶色の尖（とが）り鼻に、丸鼻、焦げ茶薄茶白の3色と、3種類もいる。尖り鼻と丸鼻が多い。そして猫が鼠を弄（もてあそ）ぶように、というが、ほんとに猫はちょっと鼠をころがしては放ち、逃げかけるとまた咬む。その癖食べない。女房は猫に腹を立て、鼠を哀れみ、猫からとりあげて裏庭に逃がす。弱肉強食は残虐ではなく自然であって、人間だって牛も豚も殺して食べているのだ。だから食べるのならまだ許せるのだが。



こんなに小さな鼠の足音を誰も家の中で聞いたことはないから、みな近くの藪に住む野鼠（のねずみ）であろう。人の目の届かないところにこの小さな生きものはそれほどいるのか。人の知っている範囲なんて限られているん

だねえと、もの好きな女房は妙なところで哲学的になる。

別の日、書斎の本棚の後ろでガサゴソ音がする。

猫は2匹して緊張感漂う顔で、背筋を伸ばして傍らにじっと座って待っている。

何だ、これは？

2時間たっても猫は動かない。音は止（や）まない。

しびれを切らした女房が本を何段か抜いてみると、出てきたのは土竜（もぐら）だった。その毛皮のしなやかなこと、ビーズ玉のような眼の可愛いこと、短い手足についた爪の長いこと。小学生の子どもたちが帰ってきたら見せてやろう、と女房が牛乳パックに土と一緒に入れてやると、土竜はさらに3時間休まずガサゴソ動き続けた。女房はやかましいのに閉口したが、猫が襲ってはと傍を離れられない。



子どもたちは案の定（じょう）大騒ぎ。近所の子も何人か集まり、眺め、瓶に移そうとして、あ、逃げられた。モノスゴイ速度で土竜は穴を掘り地中に戻って行ったものである。

ラッテは鳥も捕る。雀に燕、鶺鴒（ひたき）に目白。片っ端から埋葬してやる庭が広くて幸いというべきか。

ある日、傷ついて廊下でバタバタしている鳥を見て、愛鳥家のじい様があわてふためいた。女房には何の鳥だかわからなかったが、「これは鶯（うぐいす）じゃ」とじい様は言う。尻尾の短い、およそ地味な茶色がかった緑の鳥で、目白（めじろ）のほうがよくきれいな「鶯色」である。「梅に鶯、と言うがの、たいてい目白を見て鶯だと誤解しちよるんじゃ」とじい様は続けて解説する。確かに、鳴く鶯の声に立ち止まって姿を探しても、藪の奥深く隠れてまず見つからない。鶯は声が派手なわりに、見られるのを嫌う恥ずかしがり屋なのだ。

その傷ついた鶯を即刻獣医に連れて行け、とじい様が言ったもので女房は目を白黒した。が、父親は本気である。目の白黒が元に戻らないまま女房が調べて電話をしてみると、2軒目の獣医が、ウチは県指定の野鳥保護医です、と言うので、はあ、それでは、と連れて行くと、獣医は掌に鶯を乗せ、くるりと上に指を丸めて筒にし、その中で小鳥にバランスをとらせた。どうもフラフラしているから、翼もだが脳をやられているかもしれない、と診断する。預かってくれたが、2日後死んだと連絡が来た。小さな命ほど、救い難（がた）い、と言う。

## (五) 発情オンパレード

山羊の二度目の発情が、予告通り 3 週間目に来た。生き物であるからには発情し、交合し、繁殖するのが自然の理である。人間とても例外ではない。ただ雌山羊の場合、やかましく雄を呼ぶというだけである。女房は諦めて種つけをしよう、と亭主に提案した。団地住まいでこれ以上やかましいのをほうっておくわけにはいかない。

それにしてもねえと、ためらう亭主に効く一言。

「子山羊はカワイイと思うよ、ね？」

とたんに亭主の目尻が下がった。

「そりゃあ、カワイイだろうねえ！」

よし、決定。

女房は近所で 1 トントラックを借り、山羊を荷台にくくりつけて農家に連れて行く。もの好きな女房だが今までトラックは運転したことがない。エイヤ、と気張ってねじり鉢巻を締める心境である。女房が交差点でギアを切り替えていると、山羊は鳴きわめくは、トラックはでかいはで、心臓が口から飛び出そうである。

種つけはごくアッサリと終わった。草食動物であるから、長々やっていた日には肉食動物に襲われるのがオチだろう。メスの発情した匂いがかぐと、オスはすぐにその気になって後ろからのしかかり、動物に強姦はない、というのを女房は納得した。この点は動物のほうが人間より上等ではないか。人間は性的結合をイヤがる相手にも強制することがあるが、動物はその気になっている相手しか対象にしないのだから。

帰りの運転は慣れて、鼻歌混じり。

少し前に、夫婦は雌の野良犬を飼い始めていた。やかましくて女房の命令をまらできなかった柴犬がいなくなって、ああせいせいしたと喜ぶ女房に、亭主が酒の肴に好物の焼き豆腐をつつきながら、さみしいねえ、と言ったのである。

「犬は遊んでくれるけど、猫も山羊も遊んではくれないからねえ」

女房は一瞬、飯がのどに詰まりかけた。自家製の白菜漬けを急いで口にほうりこみ、一緒に飯をゴクンとのみこんでから、マジマジと亭主の顔を見た。50 男は本気である。

そのころ近所をウロウロしていたのが、肋骨が見えるほど衰れに痩せこけ、おどおどとした目つきの、狐顔の犬だった。声を聞いたことがないほどおとなしいのが女房の気に入った。やかましいのはもうコリゴリである。それに、1 日 15 分の散歩はどうも体にいいようだった。ウエストが細くなったのである。名づけて「犬ダイエット」。

よし、じゃあこのおとなしそうな子を飼ってみよう。

柴犬は元気いっぱいグイグイ綱を引っ張ったものだが、今度の狐顔はまるで引っ張らず、空気だけかと思うほど軽い。女の子で狐顔のきっちゃん、幸運の吉（きち）と名をつけた。

犬小屋は柴犬のいた藁（わら）小屋である。初め山羊小屋に入れてみたのだが、山羊が怒って頭突きをくらわした。小さな犬はふっとばされてキャンと鳴いた。ああ声は出るんだと女房は喜んだが、三度頭突きをくらわされるに至って、衰れをもよおし、わら小屋が犬小屋となったのである。

が、思いもかけないことがおこった。

吉が発情期に入ったのである。

雄の野良犬がこれでもかというほど寄ってきて、乗っかっているのを女房が追い払うハメになった。今度こそ避妊をせねば、と安い獣医を捜して電話をかけ、どこかと場所を聞くと、留守番のばあ様が

「神社の前にイベスヤってあっでしょう。その下さ降りてったとこなんですけど」

「は？」

「あのねえ、神社の前さイベスヤさん、とかナビヤさん、とかって店があるっしょう」

わかった。

イベスヤは「恵比寿屋」、ナビヤは「なべ屋」だ。



茨城弁はイの段とエの段が逆転する。

食堂で「えびフライ1つ」は「いびフライ1つ」になって、慣れないものは「指フライ」かとギョツとする。池をエキ、駅をイケと発音するのはよそ者にとって混乱の元だ。「イノグあります」と文房具屋に書いてあるのは「絵の具あります」の意味だ。ご丁寧に発音通り字を書いている。同様に小学1年生は連絡帳に「あした『えろいんぴつ』をもってくる」と書く。まさかエロいものではなく、「色鉛筆」である。

カタカナ英語まで訛（なま）って、小学校の入学式では主任さんが必ず「ペーテーエー会長挨拶！」と気張って言うのに女房は椅子から滑り落ちそうになり、釣堀の看板にフェッシングパークと大書してあったのには、そこから目が離れなくて車をぶつけそうになった。

サウナに行くとばあ様たちが「おめえ、今日どうやって帰んでえ？」「今日はよ、イリコが迎えに来るんでえ」と話している。たぶん「イリコ」は「孫のエリコちゃん」だ。しかし山口県でイリコは煮干しの意味である。孫がイリコなら親は鰯（いわし）かい、と女房はひとり吹き出しそうなのをこらえる。

息子の同級生が祖父母宅へ行き、ばあ様が「ええい、このへえめが！」と怒るので「ばあちゃん、『へえめ』って何？」と尋ねると、「はいだよ、はい！」と怒鳴られ、「灰!？」ともう一度目を剥（む）いた。茨城弁では蠅（はえ）を「はい」と言うだけでなく、憎たらしい時には「へえめ」、蚊を「かあめ」とも呼ぶ。犬に吠えられて「この犬め！」と言うのと同じである。

今度蠅や蚊がブンブンうるさい時、口に出して言ってみなさい。

「このへえめが！」

「ええい、かあめ！」

実感があるから。

獣医の予定は詰まっていて、避妊手術は1週間待てと言う。しょうがないからフェロモンをふりまく雌犬を2階のベランダに隔離し、女房は朝晩抱きかかえて降ろしては散歩させるハメになった。

そこへ、ある夕方、庭を犬が走っている。女房は目を疑った。犬の大きさも、毛色にも、見覚えがある。首輪も、女房が買ってやった首輪と同じである。まさか、と思いながら、呼ぶと来る。鎖もつけさせる。半信半疑で近所の人に見せると「まちがない、あの犬だよ。ジョンだよ。え、どうしたの？ 貰われていったんじゃないの？」と尋ねられる。

「帰ってきたのよ！ 40 キロを！」

「え、まさか！」

女房はへたへたと坐りこみそうになった。せつかく追い出したと思ったのに！

しかも発情していて、吉に乗っかろうとする。かたっぱしから寄ってくる野良犬には「俺の縄張りから出て行け」とえらい勢いで吠えかかる。「おとなしい、いい犬ですよ」と老夫婦に進呈したのだが、おとなしくはない、あの野郎嘘をついた、と愛想をつかさ、ソロツと戻しに来られたか。あるいは発情して興奮したジョンが脱走して、そのまま40キロを駆け戻ったか。

「この子はウチを選んだんだよ」亭主は満足げに言う。

女房は満足どころか、堪忍袋の緒が全部切れて、心中沸々（ふつふつ）パンパンと沸騰し続けている。山羊と雌犬の発情でいかげんカリカリ来ているところへ、放蕩息子の帰還であった。散歩も雌犬とは別に行かなければいけない。去勢手術もせねばならない。女房の目は吊り上り、当り散らされる実の子どもはいい迷惑である。

もう何にもないよね？

女房は考える。この女房、どういうわけかトラブルが向こうから寄ってくる。アメリカに亭主と4人の子といた時には、たった1年の間に下の息子の耳の手術、車の事故、女房の四度目の骨折と入院手術、女房の裁判所行き、亭主の交通事故と救急車での搬送、上の娘の湖転落、自転車盗難、とテンヤワンヤで、イタリアに4年半いた時には、車の事故四度、すりの被害、下の息子の交通事故と救急車、女房の脱臼、五度目の骨折、乳がんの治療と二度の入院手術、とこれまた盛りだくさんだった。

日本語でもイタリア語でも、二度あることは三度ある、と言う。英語では、雨が降る時やいつも土砂降り。

動物トラブルは、もう、ないよね？

しかし。

やっぱりあった。

捨て犬である。まことに可愛らしい茶と白の仔犬で、掌にチョココンと乗る。

「可哀そうだよ、かあさん、餌やらないの？」

「そう思うならアンタがやんなさい、かあさんはもう知らないっ！」

しかし3日目にはさすがに見かねて女房は餌をめぐんでやる。とうとう動物の数が人間と同じ6匹になってしまった。動物園の開園である。

幸い仔犬は1週間ほどで貰われていった。残りの2匹の犬は、平日の朝晩は女房と子どもたちが散歩に連れて行き、週末は亭主が行く。

ジョンは、ある日散歩で寛大な亭主に鎖を放してもらったところ、すぐさま山羊にとびかかって血が出るほど咬みつき、激怒した亭主と女房にしこたま蹴りをくらってから、やっと女房の言うことをきくようになった。

それでも去勢手術からの帰り、痛くて気が立っている時のジョンは、おとなしく車に乗ろうとしない。短期で乱暴な女房に手を振り上げられれば、ジョンは咬みつこうと鼻に皺をよせ、歯茎をむき出しにして、こんな痛い目にあわせた張本人の女房に怒る。傍を小学生の一団が通りかかったもので、その前で女房が奥の手の蹴りを出すわけにもいかず、怒りと悔しさで湯気を立てながら犬を睨（にら）んでいると、獣医のところのばあ様がヒョコヒョコと近づき、「あんた、ホラ、車に乗るんだってよ」と声をかけたたん、ジョンはサッと車に乗った。

なんでこいつはわたしの言うことはきかないくせに、ばあ様どもの言うことばかりよくきくんだ！

沸騰したやかんの蓋がカタカタなるごとく女房がカッカきいていると、中学生の娘が、そりゃ最初の飼い主がばあ様だったからじゃん、と得意げに謎をといてみせる。

女房からすると、それほどには彼女と歳の差があったようには思えないのだが。



吉（きち）

雪

ジョン

2匹の犬は女房の顔を見れば尻尾を振り、女房が手を振ればいっそう激しく尻尾を振る。

可愛いじゃないか。

亭主が目を細める。

ふん、と女房が鼻を鳴らす。まだジョンは誰か欲しい人にくれてやるつもりなのだ。写真を撮り、「飼い主募集中」のビラをつくっては、近所の商店に貼らせてもらう。

「何、貰われてもまた戻ってくるさ。ジョンはあんたが好きなんだよ」と亭主が笑う。

いっぽう山羊は冬、寒いもので外の草を食べに連れ出してもらえなくなった。近所の白菜畑に残された売りものにならない白菜と、牛の配合飼料で暮らしている。時々檻の中で暴れまわったり、イナバウアーのように首を後ろにそらせたりしている。亭主名づけて山羊バウアー。



チヨコ

山羊や犬を触った後で猫を撫でると、その毛の柔らかいこと、小さな頭蓋骨の華奢なこと、吠えないこと、手がかからなくて可愛いことといったらない。

山羊より犬より、猫が一番可愛いよ、ね？

## (六) 犬の散歩

キョキョ、キョキョキョキョと鮮やかに鳴く声に夫婦が顔をあげると、不如帰(ほととぎす)が一直線に空を渡っていく。この鳥が地面や木の枝にいるのを見たことはない。だから、メロディの美しい、「卯(う)の花の匂う垣根に ほととぎす 早も来鳴きて 忍び音もらす 夏は来ぬ」という歌の歌詞は、美しい情景のためのフィクションではないか、と女房は考える。

犬は空高い鳥には興味を示さない。

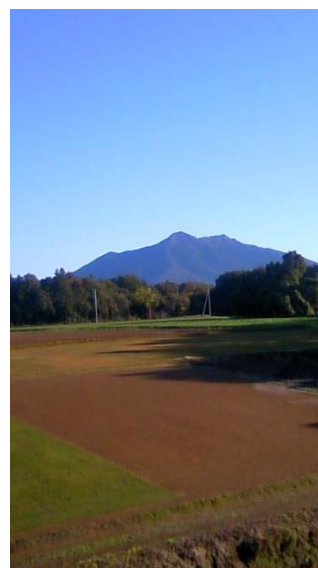
が、吉は散歩で鎖を放されると、芝生の上の鶺鴒(せきれい)を追いかける。膨らんだ白い袖のシャツに黒のベストとズボンをはいたようで、ヒラリ、ヒラリ、と波打つように飛ぶ優雅な鳥である。犬に鳥が捕まるわけではないと女房は笑うが、芝畑に羽が散らかっていることがたまにあるのは、鷺(わし)にやられたか、野犬にやられたか。

このあたりは自然が豊かで何種類もの鳥が見られる。犬の散歩の際の楽しみである。

広い芝生の上で空の階段を上がるように、羽ばたきさえずり続けながら少しずつ高度を上げていくのはおなじみの雲雀(ひばり)。林の傍でドラミングが聞こえたら、赤啄木鳥(あかげら)が頭と下腹を鮮やかな朱に染めて木の幹にしがみついている。ジージーと鳴くのは横縞の小雀(こがら)、ツツピーとつつましく鳴くのは女房がお気に入りの四十雀(しじゅうから)。

林の下草の中で犬が通り過ぎるのをじっと待っているのは、のんきでとろい小綬鶏(こじゅけい)。100年前に中国から食用に連れて来られたというこの鳥は、サッと飛びあがるなどという器用な芸当はせず、灰青と錆朱の地味派手な体で、もっぱらヨタヨタと歩く。大きいのは雉(きじ)に山鳥、ただしめったには見られない。

亭主と女房が家を建てた土地は、新興住宅街の端っこにあって、裏には1軒の家も見えない。一つひとつがサ



ツカーコートほどもある芝畑がいくつも広がり、その向こうには杉林と雑木林、さらにその上には悠然と筑波山が見える。

この空の広い、開けた景色が気に入って土地を買ったのである。わりに安くもあつた。

20年近く前に家族が遠く広島から引っ越して来た時には、「芝畑」が何であるかわからなかった。一面の丈（たけ）の短い草原で、公園にしては遊具がない。牧場にしては牛がない。今まで見たことのない風景だったのである。

不動産屋さんに尋ねると、不動産屋さんは女房の質問の意味が理解できなかった。芝畑を見て「芝畑」とわからない人間が世の中にいるとは知らなかったのである。

イヤ、日本は広いね。

どうも芝は、筑波山周辺の農業の特産物らしい。慣れてみると、川沿いの低地は水田だが、少し高台の水の便の悪い土地には白菜畑やキャベツ畑もあるとはいえ、芝畑が圧倒的に多い。列島改造論が叫ばれ、ゴルフ場があっちにもこっちにもできたころから広がったのか。

10月に夫婦が犬を飼い始めたころは、露のおりた収穫前の芝生に朝日がキラキラときらめき、まるで緑色の宝石の中を歩いているようだった。都会暮らしから考えたら、とんでもない贅沢（ぜいたく）である。

11月に入ると芝が紅葉する。芝の紅葉なんて亭主も女房も茨城に来て初めて見たが、全部の芝畑というわけでもない。そして霜がおり霧が出るころ、芝畑のあちこちに水たまりのように銀色に光るところが点々と見える。不思議に思って近づくと、直径5センチから10センチほどの小さな蜘蛛（くも）の巣である。地面に水平に巣を張る蜘蛛がいるのだ。巣についた霜や霧の水気が朝日に輝く。これも珍しい光景だった。

それが12月になると、草は枯れ木枯らしは吹きすさび、家から出るのがイヤになる。それでも可哀そうだから、昼近くなっても午前は女房、夕方は下の息子が2匹の犬の散歩に出る。

ふと気がつくと、ジョンのウンチが小屋の脇の傾斜地に点々とある。

ありゃ、しまった。

このころ散歩が朝一番でなくなったからかねえ。

犬は自分の小屋の傍でウンチをしたがらず、散歩して離れたところでしたがるけれど、一度、我慢できず小屋の傍でやり始めると絶対なおらないよ、と何人かが女房に言う。

女房はゲンナリした。

ウンチは臭い。

毎度埋めてやるのも手間だ。

よし、しつけてやろう。

散歩の前にジョンを呼び、鎖をひきつけてウンチのところへ顔を持っていくと、犬は抵抗して首を振り、女房の手を咬もうとする。「あんた、何よ」と女房が怒ると、「なんでこんなことで怒んだよ。いいじゃねえか？ うざい！」という顔をする。ハテ、この表情はどこかで見たような、と思ったら、上の息子が反抗期まっさかりのころ、説教をくらうと、顎をあげ、下目使いに女房を憎々しげに睨（にら）んでいた時の顔と同じである。

犬と息子が同じ表情か、と思い当たった瞬間、女房は吹き出しかけたが、ここで笑ってはしめしがつかない。

グッところえ、「あんたね、これはあんたが思っているよりずっと悪いことなんだよ、え？」と声を荒げて鎖をグイと引っ張ると、女房の形相が変わったのに気づいた犬は、「え、そうだったんですか。悪いことだったんですか。知りませんでした」ととたんに耳を伏せ、神妙な顔に変わる。それを見てまた女房は笑いそうになったが、臍下丹田（せいかたんでん）に力を入れ、「そうなのよ、悪いのよ」ともう一度睨（にら）みをきかせて言い聞かせる。

犬を飼い始める前、犬は笑う、というのを聞いて、女房は首をかしげていた。「可愛いと思えばそう見えるのかねえ、親バカという言葉があるが犬バカもいるんだか」と信じなかったのである。が、犬に慣れてみると、ポーカーフェイスの吉はともかく、ジョンの表情は豊かでわかりやすい。



いつかはずみで鎖が離れ、とことことジョンが歩いて居間のガラスの前まで来て、女房と亭主を見つけたとたん、パッと顔が明るくなった。あれは「笑ったんだ」と女房は今では確信している。女房も立派な犬バカになったらしい。犬の知能は人間の3歳程度などというが、女房の子どもが小さかったころ、トコトコと歩いてふり返り、母親の顔を見てニコッと笑ったものである。うん、同じだ。

毎朝散歩の前に女房は根気よくウンチを点検し、犬を呼び、スコップでウンチをすくってはジョンの鼻先に突きつけ、この馬鹿、ここでウンチするんじゃないよ、と睨み、それだけでは効きそうにないので、一番敏感な、という鼻先を叩いて叱る。ジョンは憮然として、後でフガフガと鼻を鳴らす。

散歩でウンチしたらちゃんと褒める。

ひと月たった。

なんの変わりもなく、ジョンは小屋の周りにウンチをし続ける。「おまえはお利口な犬じゃないのかい」と鼻先を叩くと、ジョンは「はあ、スイマセン。叱られるのはわかるんですが、お尻がいうことをきかないんです。ウンチは出てしまうんです」と情けない顔をする。

確かに人間だと、便意を感じたらトイレに行って用を足すもので、1日2回の決まった時間にだけ用を足すなどという芸当はできそうにない。が、「しつけのできた」犬はそれをする。まさか出そうになったものを尻の穴を閉めて出さずにおいておく、などという器用なことができるはずもないから、「散歩＝ウンチ」という条件反射であろうか。

「餌でしつけたら」と子どもころ犬を飼っていた亭主が提案する。「カリカリのドライフードを持ち歩いて、散歩の時ウンチしたら一口やるんだよ。芸を仕込む時はみんな餌をご褒美（ほうび）にしてしつけるんだから」。

ナルホド。

散歩に出る前に女房はポケットにカリカリを忍ばせ、ウンチをすると呼んで与える。すると2、3回で食べなくなった。安いカリカリはマズイのである。

ダメだこりゃ。

今度は撫（な）で撫で作戦だ。

散歩でジョンがウンチをした後、女房は「お利口！」と叫んで呼んで、背中を撫で撫でしてやる。ささやきながら。

「おまえはお利口だねえ、いつもこうやって外でウンチするんだよ、そしたら怒られないからね。ナデナデしてもらうのは気持ちいいでしょ」

「お利口！ おいで」と呼ぶとジョンは来る。女房の足に自分の横腹をピタッとつけるのは甘えているのだ。

しかし自分は芝生の彼方を眺めながら、飼い主に尻の穴を見せて撫でてもらう、ってというのは何か違うんでないかい？

尻にお利口しろってかい？ わたしゃお犬様の召使じゃないんだけどね、と女房は首をかしげる。春が来て抜け毛の季節、ま、ついでに無駄毛を取ってあげるけど。それにあんた、ウンチのことを「お利口」という名前だと思ってない？

こうして根気強くしつけを始めて半年、ジョンと吉は小屋の周りにウンチをしなくなった。

やったね。

暑いあつい夏がきた。

日が昇ると同時にカンカン照り、9時には散歩に出る気も失せるので、女房は手早く娘の弁当をつくって7時過ぎに散歩へ出ても汗みどろ、それから娘を学校へ送っていくと、車を運転しながら女房の息は乱れ、目は霞み、意識は半ばもうろうとしている。

危ない。

ほとんど熱中症である。

一計を案じ、女房は5時半にとび起きて散歩に出ることにした。30分歩いても1滴の汗も出ない。蝉もまだ鳴き始めず静かで、爽快である。

あきれたのが亭主だった。

ふだん亭主の朝飯をつくるのに6時に目覚ましをしかけても、女房が起き上がる

のはそれより 20 分後、亭主より遅い。女房の寝起きの悪さは並大抵ではないのだ。それがどうして犬のためなら目覚ましを鳴る前にカパッと起きられる？

寛容なのが一番の取り柄の亭主殿は何も言いはしないが、その穏やかでまっすぐな眼差しは、「今まで俺は女房に大切にされていると思っていたが、それは大きなおおきなマチガイで、実は犬以下だったのか？」という疑惑を如実に告げている。

女房はあわてた。

単細胞で、いかに熱中症にならないか、しか考えていなかったのだが、亭主の誤解は哀れである。犬の散歩に行かない日もハリキッて亭主と同時に起きることにした。

今までより手のこんだ朝飯が食えて、亭主殿はご満足である。

犬好きの亭主はフリスビーを買ってきた。が、慣れていないと、犬が遠くからくる大きな物体をジャンプキャッチするのはなかなか難しい。それではと亭主がドライフードを放ると、とびこんだジョンは、思い切り伸ばした前足をしゃがんでいた亭主の顔に叩きこみ、亭主は後ろにひっくり返った。

懲（こ）りて低く投げると、今度はジョンは飼い主の股間にパンチをくらわせ、亭主は前に悶絶した。

犬はよく遊んでくれる。

もの好きだが気性の優しい亭主は、いつも鎖につながれている犬を哀れみ、散歩で裏の広大な芝畑に出ると犬の鎖を放してしばらく自由に走らせた後で、呼んでまたつなぐ。が、ヤンチャ坊主のジョンは帰ってこない。遊びたくて、存分に走りたくてしかたがないのだ。

従順な吉はすぐに戻る。呼ばずとも飼い主からつかず離れずで、まことに手がかららない。

ある秋の日、林の中で鳥が一声鳴いた。吉はすっ飛んで行き、しばらくすると両掌に乗るほどの鳥を口にくわえて戻ってきた。狩ったのである。

へえ。

お見事。

意外な才能。

やきもち焼きのジョンがすぐとりあげ、なぜか土に、埋めた。吉はまた掘り出してくわえて帰ろうとしたが、あきれた亭主が放り出した。家まで帰ってその話をすると、もの好きな女房は目を輝かせ、「ゼヒとも見たい、拾っておいでよ、ねえ、あんた」と亭主をせつつくので、人のいい亭主殿はヘコヘコと取りに戻った。

「いったいどうするんだよ？」

「食べよう」

「は？」

「これ絶対食べれるやつだよ。まちがないよ、この錆（さび）朱と灰青は小綬鶏（こじゅけい）だよ、字からしてにわたりの仲間だよ」

「いったい誰がさばくんだよ!？」

「わたしがやるよ」当然とばかり女房は答える。

「やりかた知ってるのか？」

「魚と一緒にでしょ。鱗（うろこ）の代わりに毛をむしって、はらわたを出して、鰭（ひれ）や尻尾の代わりに足の先切って」

女房に釣りを教えたのは亭主だが、魚と鳥を一緒にするとは恐れいった。そこへ声を聞きつけ、80になるじい様がノソノソと出てきた。「昔は空気銃で小鳥を撃っちゃ食いよったもんだよ、儂（わし）が子どものころじゃがの」と変わらぬ山口弁で言う。

「うん、これは食べれる。よし、儂がさばいてやろう」

亭主は盛大にのけぞった。

この義父は何十年來の熱心な野鳥の会の会員ではなかったか？ 一時は県の支部長まで務めたのではなかったか？

「そりゃ生きちよる鳥なら介抱してやるがの、死んだものはしかたがない。食うてやるほうが供養じゃ」

昔とった杵柄（きねづか）、じい様がなんの苦もなくさばいた鳥は、にわたりの若鶏ほどの大きさと、野鳥らしく肉はエラク硬かったが、骨と一緒に煮た出汁（だ

し)はエラク旨かった。眉(まゆ)をひそめ、うどんから肉を全部つつきだした高校生の上の娘も、汁はおいしい、とうなずいたのである。そして学校で話し、えらく変人扱いされた。

## (七) 仔山羊誕生

年の暮れに種つけをした時、女房は山羊の妊娠期間が5カ月だと聞いていた。出産は5月の末になる筈である。お産が近づくと、出口からヌルヌルした液が出てくるからわかるよ、と言われていたから、女房は毎日かがんで尻を覗く(のぞ)く。なかなか変化がない。だいたいどこから出てくるんだろうと思うが、人間だとオシッコの出口とウンチの出口の間にそれ専用の出口がある。とすると、ま、あの辺かな、と尻の、毛の生えてない逆三角形のピンク色のシワシワの部分、ゴメンね、と女房は覗く。

山羊は乳も大きくなってきた。たくさん出そうである。亭主は飲みたいが蹴飛ばされるのはイヤだから、「おまえ搾(しぼ)れよ」と女房に言う。女房も搾りかたはまるで知らないのだが、この亭主には、珍しいことは女房に言いさえすれば、必ず目を輝かせてやってくれるだろう、という妙な信頼感がある。

山羊の腹はバカでかくなり、何匹腹にいるんだろうかと夫婦は頭をひねる。1匹ないしは2匹、たまに3匹のことがあると言う。母山羊自身はひとりっ子だったらしいが。

さすがに母山羊は歩き方がヨタヨタしてきた。アスファルトを歩くとペシャペシャと妙な音をする。後ろ足を見ると、今まで山羊は2つの蹄(ひづめ)で、つまり人間でいうと2本の指の爪先立って歩いていたのが、後ろ足の踵までつけて歩いている感じである。

重かろう。

人間でも妊娠中は体が重い。

5月の20日を過ぎると、なんとなくピンクの逆三角形が膨らんできた。もうあまり先のことはなさそうである。

出産時はギャアギャア鳴くのか。



「いんや、気がついたら生まれてた、てなもんだよ。ま、たまには難産で死にそうな声出すのもいて、しょうがないから腹へ手え突っこんで引っ張り出すこともあるけどね」と山羊農家のおばさんは言う。

頼むから静かに産んでくれ、ここは団地だからな、と女房は山羊に手を合わせて拝む心境である。山羊の産婆をやる自信はない。

その日。

前日が5月とは思えぬ暑さだったのが、うってかわって風が涼しい。日中いつものように空き地に杭を打って草を食べさせ、「さあ夕方は寒い、檻に入れてやろう。今日はえらく鳴かないね。あれ、珍しい、座ってるよ」と女房が近づいてみれば、オー、仔山羊が1匹傍にいる！

猫よりは一回り大きい。全身濡れている。下半身には粘膜がついていて、それを母山羊が一心に舐めている。母山羊の尻からは大きな水風船のようなものがぶら下がっていて、これは仔の入っていた袋か。臍の緒（へそのお）らしきものも見える。ということは、生まれてから1時間もたっていない。

たいしたもんだ。

「人間なんか大騒ぎするのに、静かにひとりで産んじまったよ、スゴイねえ、草食動物だものね」と女房は呟（つぶや）きながら、「ハテ、寒いね、このまま外に置いとけないよ。中に入れなきゃ。でもこの産まれたての仔山羊にわたしが触ったら、まちがいなく母山羊は襲いかかるだろうなあ。ハテ困った」と悩む。

イヤイヤやっぱりほうっちはおけない。下の娘を呼び、母山羊の鎖をひかせて女房は仔山羊を抱え上げた。濡れている。さっさと檻へ連れて行くと母山羊も従順についてきた。女房が手を離すとまだ足の立たない仔山羊はペシャリと腹から落ちた。

おやゴメン。乱暴だったね。かあちゃん山羊、お産の後は疲れてるよね、よしよし。

牛の配合飼料をやると母山羊はむさぼり食った。

犬が騒ぐ。「今までいなかった新しいのが



いる！小さい！何だこれは！」と興味津々（しんしん）で目を見張り、尻尾を振っているのは歓迎のしるしだろう。犬の全身に嬉しさが満ちている。いい兆（きざ）しである。仔山羊に咬（か）みついたらたまらない。



翌日。

仔山羊は立っている。

ヨタヨタとおぼつかない足どりで歩く。

なんとも言えず可愛らしい。

触ると真っ白い毛皮のフワフワ柔らかいこと。母山羊の毛は薄汚れてゴワゴワ硬いの。仔山羊を抱きあげると、驚いて鳴いた。鳴き声も母山羊より幼い。

赤ん坊を抱くように女房が仔山羊を胸に抱えると、これも柔らかい耳がヘタヘタと頬をこすり、思わず女

房の顔に笑みがこぼれる。母山羊と同じ横長の瞳が、顔の両側から女房を見つめる。白い頬の、眼の周りがうっすらピンク色に染まっている。

あんまり可愛いから女房は日に二度も三度も仔山羊を抱きかかえる。口先で頬をつつかれても可愛い。

亭主もいやがるのを追いかけては抱っこして喜んでいる。その目尻の下がった顔は、まるで初孫を抱いたジジの如し。

都心にある亭主の会社で、山羊の仔が産まれたという話題になる。女房が苦心して写真をメールで送ると大騒ぎ。

そこへ産休で休んでいた女性社員が、生まれた赤ん坊を連れてきた。その顔を見て亭主が「いやあ、人間も犬も山羊も、小さい時はみんな文句なしに可愛いねえ」と笑ったもので、女性社員は本気で腹を立てた。

わたしの可愛い赤ちゃんを、山羊の仔なんかと一緒にしないでくださいっ！

仔山羊の腹を見ると、臍の緒が乾きかけ、その下にでっぱりがある。もっと下に乳首が2つ見えて、もうひとつでっぱりがある。はて、これは雄なのか雌なのか。母山羊の腹を下から見たことがないからどうにもわからない。



謎は 1 週間ほどで解けた。おしっこが腹の真ん中から真下へ落ちていたのである。母山羊は小腰をかがめて尻のほうからするから、子山羊は雄だ。ひと月すると、下腹のでっぱりは 2 つのタマだと明らかになってきた。オチンチンとタマがずいぶん離れている。

ふうん。

仔山羊は母山羊の右側の乳しか飲まない。左側の乳はパンパンに張っている。たぶん乳首の先が詰まって出が悪いのだろう。痛いに違いない。子どもを産んだことのある人ならたいてい経験がある。

これは搾ってやらねば。

が、母山羊は逃げ回って乳になんぞ触らせない。

人間がそんなところに触ったことないものねえ。それにお乳が張ってる時は、ちよっと触られてもメチャクチャ痛いものねえ。

「山羊の乳を搾（しぼ）りたかったら、杭（くい）をな、3 本打つんだよ」と近所のじい様が言う。「慣れたら杭なんぞいんねえけどよお、おめえじゃ無理だっぺ」

「へえ。3 本？」

「んだ。首んとことな、後ろ足 2 本だ。そこへ足いくく（る）んだ。台の上だと山羊が高くなるからよお、搾る人間が楽だっぺ」

「で、牛みたいに横から搾るんで？ それとも後ろから？」

「そりやおめえ、後ろからだっぺよう」

「蹴とばされねえ？」

「だいじ（大丈夫）だあ」

こう、な、とじい様は親指と人差し指で輪をつくって見せ、

「で、残りの指いギュッ、ギュッ、てやって搾んだよ」

が、女房は杭を 3 本打つのを面倒がった。下手が釘をまっすぐ打てないのと同様、「かけや」を振り上げて杭の芯に打ちこむのは、女にしては力があって、廊下の電球が切れたら亭主を呼んで肩車して換えさせる女房も、苦手なのである。それに余分の杭が手元にない。

山羊小屋を眺め、杭のうち2本は檻（おり）の柱で代用することにし、もう1本、壊れたデッキブラシを地面に打ちこんだ。

さあ足をくくるぞ。

ところがどっこい。

山羊は足をピツ、ピツと跳ね上げ、逃げ回る。女房は大声で下の息子を助っ人に呼び、まず山羊の足首に紐（ひも）を結びつけ、さらにその紐を杭にゆわえつけた。ふたりで大汗をかいても30分かかる。

女房が乳に触る。

その瞬間山羊は跳ね上がる。アッという間に元デッキブラシの杭が抜ける。

それではと、女房は山羊の2本の足を檻に直接くくる。

女房は乳を搾る。山羊は身をよじる。それでも女房は搾る。なかなか出ない。

さらに30分かかって、やっとコップに半分ほどたまった。

檻は歪（ゆが）んだ。

ヤレヤレと女房が汗を拭い、乳を舐（な）めてみると、甘い。牛乳とは違う風味と匂いがする。

あくる日はコップに2杯ほど搾れた。仔山羊が吸いつく時を真似て、乳首を持つてから突き上げるように指を狭めると、ビュッと乳が噴き出てくる。欲しがっていた近所の家に持っていく。もの好きな夫婦の子どもたちは、親ほどにもの好きではなく、山羊の乳なぞ飲もうとはしないのである。

もったいない。

女房は牛乳の代わりにホットケーキに混ぜて焼き、知らん顔で子どもの朝飯に食べさせた。

「五月（ごがつ）」と下の娘が名づけた仔山羊はみるみる大きくなった。

犬の仔など産まれて1週間くらいは目が開かず、足も立たずに腹をつけたまま這いずり回っているが、山羊の仔はさすが草食動物、1週間で達者に走り、赤ん坊らしさが少し消えた。ひと月たつと、人間に捕まらないくらい走るのが速くなった。抱え上げるにもデカ過ぎる。檻から出して母山羊を杭につなぎ、雑草を食べさせる

と、互いに呼びあって、母山羊の傍から離れない。

そのうち行動半径が広がってきた。見えないと、母山羊はけたたましく鳴く。おかしいと女房が探すと、仔山羊は1メートルほどの崖下におり、また背丈よりも高い崖をタタッと跳びあがって戻って来た。山羊を山の羊と書くわけである。

犬の傍にも近づく。

しばらく前から、犬は山羊に吠えなくなっていた。

初めは山羊を檻から出し入れするたび吠えるので、怒鳴り蹴飛ばし、女房はジョンを叱った。そのうちちよいと思案をし、「今から山羊を出すけどおまえ吠えるんじゃないよ」と女房が一睨(にら)みしてから山羊を連れ出すと、犬はその時は「わかりました」という顔をする癖に、すぐに忘れて吠える。山羊をつないでおいて、「このバカ」と肩をいからし大股に歩いて女房が叱りに行くと、犬は耳を寝せ、尻尾を股の間に挟(はさ)んでとっとと逃げる。わかってはいるのだ。それを繰り返すうち、ウー、とうなるだけになり、さらにそのうち吠えもうなりもしなくなった。

ここぞとばかり、「おまえはお利口だねえ、ホントにお利口」とジョンの頭を両手で撫でさすってやる。学習させねば。

仔山羊が近づくと、ジョンは、遊ぼう、遊ぼう、おいでよ、と露骨に嬉しそうな顔で尻尾を振る。仔山羊はジョンを頭で突く。ジョンはお返しに前足をかけ、ふざけて噛もうとする。仔山羊はイヤだとヒョイと逃げる。また近づく。2匹とも嬉しそうである。吉はジョンほど遊びたがらないので、子山羊はもっぱらジョンと遊ぶ。

母山羊は警戒して、これ、あんな危ない奴のところへ行っちゃだめだよ、と声を高くして鳴くが、しだいにジョンが安全なのを理解したらしい。

ある日、犬小屋の周りの草を食べさせようと母山羊を杭につなぐと、ジョンはのんきにどうぞ、という顔をする。が、一度ジョンに襲いかかられ、3カ所咬みつかれたことのある母山羊のほうは、そののんきにはいかない。人間だって殴ったほうはじきに忘れるが、殴られて痛い思いをしたほうは10年たっても覚えているというものだ。

母山羊はジョンに頭突きをくらし、くらし、犬小屋の奥深く追いやったあげく、皿に残っていたジョンのドライフードを全部食べた。

かつての仇（かたき）をとったのである。

でも犬のドライフードには肉が入っているんじゃないの？

山羊は草食じゃないの？

亭主と女房は顔を見合わせる。

ああ、そういえば、イギリスで狂牛病が猛威をふるったのは、牛を早く太らせようと、狂牛病で死んだ牛の死骸を乾燥して粉にし、配合飼料の中に混ぜて食べさせたから、次々と伝染しちゃったんだよ、と亭主が記憶をたぐる。

配合飼料なら何でも食べるんじゃないか。旨いと思うようにつくってあるんだよ。

でも犬用だよ。

うん、そこが不思議なんだよね。

不思議だねえ。

それから、機会あるごとに母山羊は犬のドライフードをむさぼり食った。ジョンは雪の剣幕におされて黙って見ている。もはや襲おうという気は毛筋ほどもないらしい。

やきもち焼きのジョンも、飼われ始めて半年たってやっと、「犬も山羊も同じ飼い主に飼われる仲間、そして犬より山羊のほうがエライ」という関係を受け容れたのであった。

## (八) 田舎の香水

山羊飼も 2 年目に入ると、女房は何かと要領がよくなってきた。たとえば冬、山羊を空き地の木にくくりつけて枯れ草や枯葉を食べさせる。自然界を考えてみれば、草食動物は冬、枯れ草を食べねば食べるものはない。1 年目は、初めての場所だと女房が見えなくなったとたん、メエエと鳴き出し、「小さい子と一緒にい」と女房を嘆かせていたが、2 年目になると、食べ物がある間は、家が見えなくても、飼い主が傍についていなくても、山羊は文句を言わなくなった。山羊の側も要領がよくなってきたとみえる。

ただ夕暮れが近づくと家が恋しくなり、やかましく女房を呼ぶ。

あたかも幼な子が母を呼ぶ如し。

「あたしゃこんな角の生えたのを産んだ覚えはないけどね」とぼやきながら、女房は山羊を連れに行く。

いざ帰れるとわかると、山羊は恐ろしいほどの力で引っ張る。

1 年のうちで一番山羊の力が強いのは妊娠中、特に妊娠末期で、要は体重が多い時である。体重は力だ。ボクシングでも柔道でも体重別に競技をする理由が、一回りでかく重くなった山羊を相手に綱引きをやってみると、つくづくよく女房にはわかる。

山羊は必ず前へ前へと歩きながら草を食べる。

木につながれていると、木の周りをぐるぐる歩きながら食べるので、鎖は幹の周りに三重四重に巻きつき、鎖と鎖の間にはつる草だの灌木の切れ端などが盛大に取りこまれる。飼い主が鎖をほどく際にはその邪魔物を取り除くのがひと仕事。ウカウカしていると、ゆるめたばかりの鎖を山羊がグイと引っ張り、アッという間に女房の指が鎖と幹との間に挟まれ、血がにじむ。山羊の動作や呼吸をうかがいながらの作業である。

さあ鎖が木から離れたとなると、山羊はものすごい勢いで家まで走って帰る。犬と違って「待て」はきかないから、女房は引きずられないよう必死で走らねばならない。山羊が角を振りふり女房を引っ張って全力疾走する姿を見ると、近所の人

みな笑顔になる。

「今度、馬車ならぬ山羊車を引かせてみるか」と女房は思わないでもないが、まず人間の命令には従わないだろう。山羊と比べると、馬はかなり従順なのだと思う。



運悪く空き地の端に葛（くず）の蔓（つる）なんぞ這っていた日、ブービートラップよろしく女房は足を引っ掛け、膝の皿をまともにアスファルトにぶつけた。1 週間は足を引きずって歩くハメになった。

いっぽう亭主は横着をして、鎖を放し、山羊がひとりで帰るに任せる。

「必ず小屋に帰るからいいじゃないか」と言う。女房がそれをしないのは、山羊の交通事故がコワイからだ。

新興団地のどん詰まりは袋小路、団地の人間と団地に用のある人間しか通らないとはいえ、夕暮れ時は帰宅やお迎えの車が行き来する。その前へデカイ山羊が飛び出したら、運転手は仰天してハンドルを切り、山羊は無事でも車がよその塀へ激突するかもしれない。山羊が死んでもまあ諦めはつくが、山羊のおかげで自動車事故、なんて想像したくもない。運転手の保険会社も、道に山羊が出てきて、なんて理由には目をパチクリしたあげく、まちがいなく飼い主の女房に 100 パーセント賠償責任を負わせてくるだろう。車に人、塀まで壊れたら 100 万円ではきくまい。下手したら 1,000 万超えるだろう。もし人が死んだりしたら 1 億だ。

冗談ではない。

こういう時は、山羊にかかる保険はないものか、と女房は広い空を見上げて考える。

ないだろうなあ。

そうだ、生協の保険に、「家族がおこした損害のすべてを保証します」というのがあった。月 100 円の掛け金で入ってるんだった。

しかし、山羊は家族か？

違うよなあ。

山羊の食べ物が枯れ草だけではちと可哀そうだから、夫婦は牛用の配合飼料を農協から買い入れ、近所の畑からは収穫後の売り物にならない白菜を、なるべくお百姓さんに一言挨拶してから、拾ってくる。

この夫婦の家の裏は広大な芝畑で、3年に2回ほどだろうか、カタカタと音を立て、手押しの機械で芝を根と一緒に30センチ角ほどの大きさに切り取る。それを東南アジアか南米出身だろうか、女房の知らない言葉を話す外国人労働者が10枚1組に束ね、長いながいトラックまで運んでいく。畑からは収穫のたびに芝と一緒に表土が消えうせるので、お百姓は数年に一度、ものすごい量の鶏糞を入れて耕し、芝の代わりに茨城名産の白菜ないしはキャベツを植える。

土地の人に聞いた話では、畑の地主はまず「芝屋」さんに土地を貸し、「芝屋」さんは時々「白菜屋」さんにまた貸しするらしかった。「芝屋」さんとは芝栽培専門の農家で、「白菜屋」さんは白菜栽培専門の農家である。

この鶏糞、ちゃんと時間をかけて発酵・乾燥させたものを入れてくれるといいのだが、手間暇かけた肥料は高い。いつぞやの夏の盛りには、ほとんど生ではないか、という鶏糞をダンプ23台分、サッカーコートほどの大きさの畑に点々と盛ってあるのが女房の書斎から見えた。

臭い。

猛烈に臭い。

鼻が曲がるどころか、もげそうである。

ご飯時は食欲も失せる。

そのわりには誰も痩せないが。

蠅（はえ）が大発生して、女房と子どもは家中蠅たたきを持って歩き、1日で36匹の蠅をたたき殺した。

「田舎の香水」は、空の広い、気持ちのいい景色の代償である。

冬の間には、山羊の食料の草が次第しだいに尽きていく。

ただ、家の裏の、団地の外の崖下の南側の斜面は暖かいらしく、一足早く、犬ふぐりだの踊子草（おどりこそう）だのが、イネ科の雑草に混じって生える。亭主はそこへ杭を打った。山羊は大喜びである。その後は雑木林の端っこの木の垂れ下がった大枝にくくったら、枝が山羊の馬鹿力に負けて折れ、山羊は脱走した。広大な芝畑を犬といい気持ちで歩いていた女房は、白菜畑の傍を山羊がのんきに歩いているのを見てギョッと目を剥（む）いた。

茨城特産の白菜は巨大である。山口県で食べる白菜の 2、3 倍はあるだろう。当然値もはる。売り物の白菜の芯の柔らかいところばかり次から次へと食い荒らしてくれたら、お百姓さんに頭を下げて謝るだけでは済むまい。弁償だ。女房は血の気が引きかけた。

まずは女房、当時はまだ山羊と仲が悪かった犬どもを急いで連れかえって小屋の鎖につないで置いて、それからあわてて白菜畑まで戻り、今度は山羊を連れ帰った。その後で改めて白菜畑を見に行くと、当のお百姓さんが見に来ている。

「間一髪、間に合った。白菜屋さんが来た時に山羊がいなくてよかった。イヤ危なかった」と背中には冷や汗がにじみかけている。

女房、とりあえず素知らぬ顔でニッコリ笑って「見事な白菜ですねえ」と世辞を言い、内心戦々恐々としながら、白菜屋さんの注意を引かないようにあくまでコソソリと、並んだ白菜を点検した。

食われた痕跡はない。

女房はホッと安堵の胸をなでおろした。

山羊の寝床用に稲わらを分けてくれと知り合いの農家に頼んだら、わらを束ねる作業に来いと言われ、下の息子を連れて夫婦は出かけた。

イヤイヤ、かがむことの多い農作業は重労働である。

「あしたはここにくるよ」農家のばあ様はニヤリと笑って自分の両腿をピシャリと叩いた。

予告通り、翌日は夫婦と息子の 3 人全員、腿その他のひどい筋肉痛に見舞われ



た。

亭主の生まれた家は農家である。

「子どものころは牛がいたから、毎日『押し切り』という道具でわらを切って牛にやるのが俺の仕事だった」と亭主は言う。確かに山羊はわらを食べる。が、寝床兼トイレの残骸の汚れたわらは食べない。

わらが汚れると、亭主のつくる家庭菜園に入れる。が、わらは土に混ぜこんでも超絶腐りにくいことがわかり、亭主はいい顔をしなくなった。この夫婦が子どものころ、わら葺（ぶ）き屋根や茅（かや）葺き屋根の農家は珍しくなかった。わらは腐りにくいから屋根にも使えるわけだ。

英語でも thatch（サッチ）は「屋根に草を葺く」という意味で、イギリスの一昔前の鉄の女宰相サッチャーさんの祖先は、たぶん草で屋根を葺（ぶ）いていた職人さんだろう。麦わらなんぞを使っていたらしい。東洋と西洋にも、けっこう共通点はあるのだ。

汚れたわらを時々取り換えていると、わらの量がどうも1年分もちそうにない。

山羊農家の山羊の寝床はおがくずだった。稲のもみ殻でもいいと、最初に紹介してくれた農協の職員さんは言って、カントリーエレベーターなるドでかい米の倉庫の場所を教えてくれたっけ。もみ殻は無料で分けてもらえると言う。これはわらよりよさそうだ、と亭主と女房は家中のでかい袋をかき集め、乗用車でもみ殻をとりに行った。

1匹の山羊を飼うのに、ここまでいろんな労働や心配がついてくるとは到底予想していなかった。

生き物は大変だというわけである。

夏の間、母山羊は大量の水を飲む。炎天下で草を食べさせていると、1日に10リットルは飲むだろう。口を水につこんで頬をすぼませ、スウウと一気に大量に吸いこむのである。

おや、犬や猫と違うね。

舌をひんぱんに出し入れして水を飲む犬と比べ、はるかに効率がいい。犬猫は人

間に比べて口がとんがっていて、水をすすするには、口の両側から空気が漏れてできないだろう。よく見ると、山羊には多少の唇(?)があるようでもある。歯をむいて笑う(?)のは、女房が見た限りでは、なぜか、雄山羊が、発情した雌の部分の臭いだ時だけである。もっとも、「嬉しい」よりは「臭い!」という顔に見えるが。犬も威嚇する時は唇(?)を上げて歯をむき出すから、口の周りが動かないわけではない。

人間の唇は、鏡をみていると、口の中の粘膜がめくれて外に出て、乾いたものだろう。

子どもの英検の問題集には、この唇があるからこそいろいろな発音が可能となり、人間は言語を発展させることができたのであり、言葉を話すという他の動物にはない人間の特殊性は、大きな脳みそのためだけで可能になったのではない、と載っていた。犬猫山羊の顔を毎日見ていると、この論拠がよく納得できる。

山羊は、飼い主は飼い主として認識しているらしく、女房が車で帰ってくるとメエエと鳴く。

「おかえり」だ。

犬もワンワンと吠えるから、女房は律義に、「雪ちゃんただいま、ジョンさん吉ちゃん、ただいま」と言ってやる。玄関を入ると猫がのそのそと現われるから、これも「おかえり」だろう。

が、犬猫と山羊はずいぶん違う。犬には飼い主の意思に沿おうという可愛げや従順さがあるし、甘えも嫉妬も見せる。飼い主が叱るとシュンとなり、撫でると嬉しそうにするから、人間と犬の間にはコミュニケーションが成立しているという感じがある。猫は英語でも「自分のほうが主人で、人間に飼わせてやっている」と言うくらいだから従順さはないが、人間に甘えるのが好きだから、やっぱり愛玩動物である。

が、山羊には、飼い主の意思を尊重する気配はまるでない。自己主張だけはする。あっちへ行くのがイヤだとなったら、踏ん張って抵抗する。家に早く帰りたい時にも、飼い主のご機嫌など気にはしない。

結論。

山羊は「家畜」だ。

ペットではない。

物置の隅から、子どもたちが飲まなかった大量の人参（にんじん）ジュースが出てきた。賞味期限はとっくに過ぎている。女房が味見してみると、ま、大丈夫。試しに山羊にやってみると、甘いのが気に入ったか猛烈な勢いで飲んだ。1リットル飲み干すのに2分とかからない。山羊が頬をすぼませ、また膨らませてはすすむ姿に女房は笑いころげた。

戸棚の奥から出てきた湿気（しけ）た煎餅（せんべい）も、溶けかけた飴玉も、正月の残りの黄粉（きなこ）も、豆腐屋さんがタダでくれたおからも、山羊は大歓迎。何か人間がおやつを持ってきてくれたと悟ると、山羊はゆっくりと体を左右にゆすっては、左右の前足を代わる代わる持ち上げては踏み下ろす。いかにも待ちかねている感じである。

ハハア、これが山羊の「嬉しい」か。

その話を3軒隣の歯抜けのばあ様になると、彼女も喜び、古くなったパンだの菓子だのを山羊にくれるようになった。あげくの果てに干したひじきの古いのまで持ってきたのには、女房首をひねったが。もの好きな亭主が湿気た海苔（のり）をやると、山羊が上顎にひつつくの難渋して下顎を左右にモングラモングラ動かしていたのは人間と同じである。

近所の別の親父さんは、植え替えの際の大根葉なんぞもくれる。近所づきあいはしておくものだ。

最初の仔山羊は、種つけ代として7月に引き取られる筈が、長野県から来る山羊屋さんの都合に合わせ、9月になった。女房は近所からトラックを借りて山羊を乗せ、連れて行った。山羊は高いところが好きだから、荷台に乗るのに抵抗はない。



これは仔山羊でなく母山羊

山羊を乗っけて運転していると、まちがいなく人の注目を引く。

信号で止まってバックミラーを眺めると、後ろの車ではまずこちらを指さし、次に携帯を取り出して写真を撮り始める。

それが信号ごとに繰り返される。

女房が学校に連れて行く時に山羊と一緒にトラックでもいいかと尋ねると、高校生の娘は目を吊り上げて「死んでもイヤ！」と叫んだ。

母山羊を分けてもらった農家に着くと、仔山羊を見て「丈夫そうないい山羊だなあ」と言われる。

その家の山羊は四六時中、狭いところに1メートルほどの綱でつながれて、配合飼料だけで飼われているから、ロクに歩いていない。足が細い。「ウチの山羊は表に出て草食ってっから」と女房は少々鼻が高い。

まだ暑い日で、女房はほかの用事と重なってバタバタ忙しく、疲れてしまったらしい。蕁麻疹（じんましん）が全身にできて皮膚科行きとなった。

母山羊がどれだけ仔を追って鳴くか、女房はヒヤヒヤしていたが、案に相違して母山羊は知らん顔。

フム。

以外にクールな子別れであった。

## (九) 二度目の出産

二度目の発情、種つけ、出産も無事に済んだ。

今回の出産は家の前の空き地で、女房と一緒に、近所の医者志望の女子中学生が一部始終をしっかりと見届けた。

山羊は異様な叫び声をあげてから、しばらくは立ったり座ったりし、やがて再び一声、二声叫ぶたびに、天を仰いで震える舌が見える。痛いのだ。そして叫びながら力んでいる様子がよくわかる。見ているこっちもなんだか力が入ってくる。

お、仔山羊の足先が見えた。

が、ひっこみ、そして今度は鼻先と両足先の蹄（ひづめ）がハッキリ見え、またひっこみ、その次には頭と胴体までがウン、ウン、と押し出される。

全身が出てきたと思うと、地面まで 30 センチかそこらあるのに、ポトンと落ちた。「産み落とす」という言葉は比喻ではないのだ。

ビショ濡れの仔山羊を母山羊は舐（な）め続け、そしてもう一踏ん張りして、もう 1 匹をポトリ。やれ御苦労さま。

可愛いかわいい真っ白なフワフワ仔山羊を、例によって女房と亭主は毎日のように抱きかかえる。

しばらく抱いていると、仔山羊が一人前に肩を上下させてフウ、とため息をつく。とても可愛らしく、そしてなんともいえず可笑（おか）しい。

抱かれているたび、フウ、とため息をつくので、女房、なぜだろうと考えた。

たぶん、仔山羊が人間に対面して縦抱っこされている姿勢では、人間からは仔山羊の顔が見えて都合がいいけれども、本人（本山羊？）にしてみれば前かがみの不自然な姿勢で、肺に十分に空気が入らない。で、肺を膨らますための肩の上下とため息ではなかろうか、と動物学者になった気分で女房は解明する。仔山羊が抱かれるのを嫌うわけだ。

こうして観察と推測を重ねた結果、仔山羊を抱きかかえる時には「縦抱っこ」ではなく、胴体が横のままの「横抱っこ」だとため息をつかないことが判明した。

科学的だ、と女房はひとり得意がって鼻の穴を膨らます。

生後1週間、檻の中に親子3匹閉じこめている間は、家族一同仔山羊を抱き放題だが、檻の近くに母山羊をつなぐと、さあ仔山羊は逃げ回る。

そこで女房はまた考えた。

「山羊は高いところが好きだよ」と山羊を飼った経験のある数人が女房に告げた  
が、確かに青森からリンゴ屋さんが売りに来た時の、昔懐し頑丈なリンゴ箱をあ  
たりに置いておくと、必ず母山羊は上にあがってご機嫌である。ということは、た  
ぶん仔山羊も好きだ。

大当たり。

2匹が駆け回り回るコースの中にリンゴ箱を置いておくと、蹄の音を立てて上り、  
あたりをしばし睥睨（へいげい）し、また降りて駆ける。時に登りそこねてころげ  
落ちるのもご愛嬌。

その箱へ女房は座った。天気の良い日で、仔山羊はしばらく寄りつかないが、跳  
ね回るのを見ているだけでも楽しい。通りすがりの近所の人、みな笑顔になる。

「可愛いねえ！」

「可愛いっしょう！」

「昔はウチにもいたんだがねえ」

「ハハハ、皆さんそうおっしゃいます」

「ウチにいたのは緬羊（めんよう）ってねえ、毛を取るやつだよ。冬の終わりに  
毛を刈ってね、それを糸に梳（す）いて染めてもらって、母親がわたしら姉妹のセ  
ーター編んでくれたよ」

「アイヤ、正真正銘の自家製セーター」

「ンだよ、もののない時代だったから嬉しかったねえ」

その話を、もの好きな女房が神輿（みこし）を担いだ地元の夏祭りの後の宴会です  
ると、「オリ（俺）はよお、ウチの緬羊の毛で初めての背広つくってもらったのよ」  
というじい様がいた。

「ヘエエ、戦前の話？」

「オイ、バカにするなって。オリは戦後の生まれだよ、おねえちゃん」

そいつは失礼しましたと謝りながら、女房も、その話を聞いた亭主も、生まれ育った山口県では緬羊までは聞いたことがない、茨城県の中央部はやっぱり昔からずいぶん田舎だったんだねえ、と話したものである。後でわかったが、このじい様が戦後生まれというのはその場の大ウソだった。

「それにしても、緬羊という山羊の種類がいるんだねえ」

首をひねる女房に亭主は吹き出した。

「緬羊ってのは羊だよ」

「え？ やっぱり？ なんかおかしいって思った。でも、どうして羊って言わないの？」

「どうしてだろうねえ」

その後女房が仕事がらみで調べた時には、未（いま）だに獣医関連の公文書では「羊」と書かず「緬羊」だった。

女房がリンゴ箱に腰かけていると、仔山羊がおずおず寄ってくる。「太郎」と名づけられた雄と「花」と名づけられた雌を比べると、太郎のほうが一回り大きい。子鬼の角のようなデッパリ2つも、太郎だけ。デッパリは、だんだん大きくなってほんものの角になる。女房の傍に最初によってくるのは必ず太郎。

リンゴ箱の真ん中あたりは女房の60キロ強の体重を支えるのに多少の不安があるので、女房は隅っこに座る。手を出すと仔山羊はサッと逃げる。知らん顔して座っていると、カタッと音がして仔山羊が1匹女房の横に乗った。ここぞとばかりに捕まえて、そのまま膝の上に抱きかかえていると、この姿勢は苦しくないらしい。じっとおさまって、おや、まぶたが閉じてるよ、寝てしまった。

この小さな、温かな、柔らかな、心臓がとくとく打つ生き物。

なんともいえない、貴重なもの。

## (十) ヨーグルトとチーズ

生れてしばらく、仔山羊の主食はもっぱら乳だが、母山羊の真似をして草も嚙(か)んでいる。が、食いきらず、出す。土も少量、どんなものかと口に入れている。そして跳ね回る。眠る。だんだん柔らかな草なら食べるようになって、最低限、ひと月たてば親から離せるという。

実は女房、このひと月を待っていた。今年こそは乳を定期的に絞(しぼ)り、ヨーグルトをつくってやろう、と狙(ねら)っていたのである。たぶん、市販のヨーグルトを混ぜてねかせれば、牛乳同様に山羊乳製ヨーグルトができる筈だ。

乳は牛からだけとれるわけではない。モンゴルでは馬の乳を飲むというから、世界中のどこかでは羊の乳だって利用している筈だ。あまり聞いたことはないけれど。

少し前に女房が英語で読んだ、エリザベス・コストヴァの「ヒストリアン(歴史家)」という吸血鬼伝説を基にした小説が、すてきにおもしろかった。舞台はイギリスからフランス、トルコ、ブルガリア、ルーマニアへと移り、ブルガリアのド田舎の農家を訪れた主人公は「納屋の『床』の味のする生ぬるい飲み物」を出され、一口飲んで絶句する。相棒に「羊の乳の水割りよ。ミルクシェークだと思って飲み干しなさい」と囁(ささや)かれ、目を白黒しながら覚悟を決めてゴクリと飲む。

「そうか、やっぱり羊の乳も飲むんだ」。この時、女房の長年の疑問がひとつ解けたのである。

もし牛の乳と、山羊の乳、羊の乳、馬の乳、そして人間の乳を比べてみたら、たぶん違うところよりは同じところのほうが多いだろう、と女房は考える。牛乳をヨーグルトにする菌はたぶん、山羊乳もヨーグルトにする筈だ。

ということは、人間の乳でもヨーグルトができるのではないか？

原乳提供者がいれば、の話だが。

まったく、女房の思考経路はとんでもない。

イヤ、ここは「きわめて柔軟である」と言っておこう。

母山羊の首と足首をくくる杭は、今年女房が2本新たに打った。山羊はなかなか



おとなしくしていないので、女房はまた考え、毎日乳搾りの前に、大好物の葛（くず）の葉をつるごと2、3メートル数本、空き地から採ってきて山羊の目の前に大量にぶら下げる。人間の幼子をなだめるのに食物が有効なのと同じ筈だとふんだのである。

女房が昔読んだ太宰治の「人間失格」に、ハンサムな主人公の部屋に大家の若い娘が来て泣くくだりがあった。主人公は黙って柿をむいて出す。理由は「ものを食べながら泣くことはできないから」。女の涙を止めるのには「泣くな」と言うより、何か食わせるほうが効果的だというワケで、まだ若かった女房は「こいつ女をバカにしてるのか」と少々むかつ腹を立てたが、案外あたっているかもしれない。

女房は山羊の横にしゃがみ、左手に片手鍋を持って右手で乳を搾る。

教わった通り、まず親指と人差し指で輪をつくるように乳を握ると、指より下の巨大な乳首に乳がたまるのがわかる。そして残りの中指、薬指、小指と順に握りこんでいくと、乳がほとぼしる。乳の出る向きは一定していないから、左手の鍋をそこへ持っていく。

昔、少女が地べたに木桶を置いて乳搾りをしているヨーロッパの版画を女房は見たような気がするが、ここでそれをやると山羊に蹴飛ばされて鍋がひっくり返るのがオチだろう。女房が陣取る場所にしても、言われたように山羊の後ろだと、確かに手から両乳までの距離が等しく便利だろうが、山羊の足と後ろ蹴りがなんともコワイ。足をくくってあっても油断はできないのである。

だいたい一度、見事に糞をポトポトと乳の鍋の中に落とされて、女房は叫び声をあげて鍋をほうり捨てた。

夏は虫が多い。蚊をいやがって女房は野良着用の長袖長パンに毎回着替え、汗みずくになって搾るのだが、それでも搾り終わった後では、薄地のズボンの上から尻を2つ3つ、鍋を握って動かせない手首を4つ5つ蚊に刺され、痒（かゆ）いといったらない。

仔山羊がある程度大きくなってくると、女房は日中、母山羊を仔と少し離してつ

ないで、夕方は先に仔山羊を檻の中に入れてしまい、その後母山羊を外の杭につないで乳を搾ることにした。

こうやって別々に連れ帰るのは楽なのだが、朝、3匹一斉にその日の草場へ連れて行こうとすると、めいめいが好きな方向へ歩くから、3本の鎖で女房は足をぐるぐる巻きにされ、コテンとろけてしまう。では、と親子を別々に連れて行くと、双方心配して離れている間じゅう、鳴き続ける。

やかましい。

朝晩の大移動である。1人と3匹が道いっぱいに広がって、近所の人たちが車で出勤する邪魔をすることがあるのだが、皆さん、この牧歌的情景にプツと吹き出して、笑顔で待ってくださる。

ありがとうございます。

皆さんのご協力(?)と我慢のおかげで、団地で山羊を飼っていただけます、ハイ。

さあヨーグルト作製。

インターネットで調べてみると、山羊農家では乳を日に1リットルくらいとるよなことが書いてある。が、プロでない女房には、とてもそんなには搾れない。

「乳い搾るんなら、仔山羊に飲ます前でなけりゃあ、つあらん(駄目じゃ)けえの」

と言ったのは亭主の父親だったろうか。可哀そうな気はするが、確かに仔山羊が飲んだ後では母山羊の乳は残っていない。

とはいえ、仔山羊の分も残しておかねば可哀そうではないか。

女房が搾る乳の量は、なぜか日によって違うが、ま、せいぜい0.3から0.5リットル。

小鍋のままガスこんろにかけて煮沸消毒し、茶こしで草や泥を濾(こ)す。冷蔵庫で冷やしておいて、3日分ほどたまったら、市販のヨーグルトを入れ、念入りにかき混ぜて置いておく。毎日蓋を開けて覗きこみ、味見をする。とろみはあまりなく、飲むヨーグルト状であるが、3日たっても酸味が今ひとつ物足りない。

女房首をひねり、「ヨーグルトメーカーなるものだと、体温程度に電気で加熱し

てたっけ」と今度は容器を冷蔵庫ではなく、台所の窓際に1日2日置いてみる。

さらに砂糖を入れてみると、ウン、こっちのほうが旨い。

いや、実に旨い。

乳脂肪が多いのか、コクがある。種にするヨーグルトの種類を、明治だの森永だの生協だの變えてみると、少しずつ風味が違ふ。

おいしいのができたよ、と自慢げに目を輝かす女房が勧めると、もの好きな亭主が飲んで、うん、これは旨いねえと言ったまではよかったが、下痢をした。腸が弱いのである。80過ぎの父親も、やっぱり牛乳で腹をこわす口だから手を出さない。両親から好奇心をひき継がなかった子どもたちも、ゲテモノには断固手をださない。いや、この女房とて、子どものころなら今ほど何でもアリではなかったから、やっぱり手を出さなかったかもしれないのだが。

女房は膨（ふく）れた。

こんな美味しいものを、どうしてみんな飲まないの!?

女房ひとりが毎日飲むには少々多い。それに飽きる。

ほかに利用法はないものか?

そうだ、そういえばヨーグルトの親戚にはチーズがある。

やってみたいねえ。

しかし、家庭でチーズがつくれるものだろうか?

数年前、女房が亭主と4人の子どもと住んでいたミラノ郊外のスーパーの一角には、対面販売の肉屋さんの隣にチーズ屋さんがあった。隣のフランスで「ひとつの村にひとつのチーズ」と言われるのと同様、チーズの種類は多彩である。

ショーケースの中には大きくて厚い円盤型のチーズ、ひょうたん型のチーズ、ポコポコ穴のあいたチーズ(昔のアメリカのアニメ『トムとジェリー』に出てきた!）、水に漬かったチーズ、緑色のカビ入りチーズ、と20種類ほどのチーズがところ狭しと並べられ、女房はみんな食べてみたくてしょうがないのだが、そんなに安くはないうえに、どれを買ってどう使えばいいかサッパリわからなかった。

いくつかテキトーに試してみると、苦かったり、堅くてバサバサだったり、酸っ

ぱかったりと、それだけ食べるとなかなか癖が強くて難しいものもある。チーズによっては他の特定の食べ物と合わせると旨かったり、加熱料理に向いていたりするのもあるらしかった。

しかし旨いチーズは、ほんとに旨い。

それぞれコクや癖があって、しみじみウマイ。

洋梨や林檎（りんご）、苺（いちご）なんかの果物と相性のいいものもある。

そのくせイタリアでチーズケーキには、まずお目にかかったことがなかった。たぶん何世紀も経て完成されたそれぞれのチーズがあまりに旨いから、それを加工してケーキに入れてしまっただけは、その完成品である旨さが台無しになってしまうからではないか。マスカルポーネというほとんど生クリームに近い癖のないチーズは、ティラミスという菓子に使われていたが。

結局亭主が一番気に入ったのは、固形のパルメジャーノだった。

これは大きな円盤状のまま、長いこと乾燥させ、熟成させてつくられる。当然ながら2年物よりは3年物のほうが値段が高い。イタリアに行く前の日本では粉しか見かけたことがなかったが、イタリアでは塊（かたまり）のままでもよく売っていた。イタリアの渋くて重い赤ワインのつまみにパルメジャーノの塊をチビチビ食べると、そのむせるほど濃厚な味が、フルボディのワインにピッタリ合うのである。

いっぽう女房が一番気に入ったのは、あまり熟成させてないフレッシュチーズと呼ばれる種類で、なかでも白くて豆腐のように柔らかい山羊チーズだった。

そう、山羊チーズ。

「小さいフランスパン」という意味のフランチェズィーニと呼ばれる皮の堅いパンに、このクリームチーズと、生ハム、ルッコラという辛味のある葉野菜を挟んだパニーニ（サンドイッチ）が、女房は大好きだった。街角のパール（立ち飲みの喫茶店）やパニーニ屋さんでも、売っているところが少なかったのは残念だったが。

イヤイヤ、再現してみたいねえ。

思っただけで唾（つば）が湧いてくるよ。

何日か首をひねったあげく、これは自分の手に余ると思った女房は、インターネ

ットでチーズの作り方を調べてみた。英語のサイトがあった。どうも「チーズの種」らしきものがあるらしい。

日本語ではレンネット。子牛の胃からとれる凝乳酵素。生きている菌。

たぶん、乳酸菌の親戚。

日本でいうならモノは違うが、「麴（こうじ）の種」とか、「ヨーグルトじゃないケフィアの種」みたいなものだろう。

みな発酵食品の元である。

チーズの種なんて日本では聞いたこともないから、たぶんヨーグルト同様、市販のフレッシュチーズで代用して大丈夫だろう。プロセスチーズは加熱殺菌してあるからダメだ。

英語のレシピによると、その種を牛乳に入れて混ぜ、しばらくそのままにしておいて柔らかい塊が浮いたら、清潔な目の粗い布で漉（こ）して水分を抜き、濃い食塩水にしばらく漬けた後で出して、冷蔵庫で保存せよ、とある。堅いチーズをめざすなら、冷蔵庫に入れておいてカビが生えるたびに酢を浸した布で拭いて、3カ月で熟成終了。

なるほどね、白い柔らかいチーズはいわば短期間の即成で、堅い黄色いチーズは何カ月も乾燥、熟成させたもの。

ウーン、堅いのは厄介過ぎる。やってらんない。

でもフレッシュチーズならできそう。

女房は決心した。

亭主は「またか」と苦笑いして黙って女房の好きにさせている。何か言っても止めるようなタマではない。

まず、女房は白くて柔らかくて癖の少ないフランス産ブリーチーズをスーパーで買って来た。3日分の煮沸済み山羊乳にそのチーズをフォークで混ぜこみ、夏の室温で放置する。すると原料チーズの塊が残ったから、その次からは面倒だが電動ビーター（泡だて器）で丹念にチーズの塊をつぶして混ぜた。

3日たつと、オー、豆腐が水の中に浮いたようになった。表



面は泡が固まったようなボコボコである。

おもしろいっ！

そっと女房が片隅を舐（な）めてみると、舌触りも豆腐に近い。

が、旨くない。

足りないのは塩だ。水の中に適当に塩を落としこみ、冷蔵庫で待つ。

毎日味見して、3日後、ウン、これならよかろう。

布は消毒がめんどくさいから、漉すのは紙のコーヒーフィルターで代用してみよう。要するに水気が切れりゃいいのよ。ね、合理的でしょ？

そういえば女房の死んだ母親も、昔から妙なことをやっては「合理的」とのたもっていた。そうか、わたしは母親に似ていたのか、まるで似ていないと思っていたのに、と女房は山羊乳をキッカケに新事実を発見する。

さて、容器の中のこの透明な水気、牧畜数千年の歴史がある英語圏ではちゃんと名前がある。ホエイ（whey）、日本語では「乳清」。でもまずい。捨てる。

豆腐状の塊にも名前がある。カード（curd）すなわち「凝乳」。そういえば豆腐はtofuという名が知られる前は、英語でbean curd（ビーン・カード、豆の凝乳）と呼ばれていた。イタリアでの名前はformaggio di soia（フォルマッジョ・ディ・ソイア、大豆のチーズ）。

凝乳の水気を切って、できたものは最初の乳の5分の1くらいの少量である。

が、思わずのけぞるほど、美味。

ホント。

生クリームを思わせる豊潤さにチーズの風味。

いやあ、旨いものを食べるって人生の幸せだねえ。

女房は大満足である。

難しいのは、毎回同じ味に仕上がるとは限らないことで、たぶん家庭の台所では雑菌が混じるのだろう。酸っぱくなったり、刺激のある不快な辛さが混じることがある。

ま、それもお愛嬌。

(十一) 開拓

女房が木を切っている。

あまり上手な手つきではない。

ろくに構えもせずにツイとしゃがんで鋸（のこぎり）を当てるので、鋸が地面と水平でない。そのうち鋸を持つ手の角度が変わってしまうと、鋸の歯の面はねじれて木にくいこみ、ニッチもサッチも動かなくなる。

ため息をつき、女房は手を代えた。今までは左手で切っていたのである。

しかし利（き）き腕の右手でも、一度ねじれた面を、しかも体の左側で切るのは容易ではない。そこで女房は木の反対側に回って座りこみ、よく木を眺めてから慎重に地面と水平に刃を当てた。

今度はよく切れる。

小気味よくシュッシュッと音が立ち、手前から向こうからもおが屑が出、刃は順調に幹にのみこまれていく。

が、力がある。

11月の寒さの中で、暖まった女房は立ち上がって上着を脱いだ。ついでに一休みして、荒くなった息を整える。

傍らの山羊を見ると、ご機嫌でつる草をムシャムシャと食っている。もう平地の草は枯れかけているのだが、木に巻きついた葛（くず）だの木通（あけび）だの山芋だのの葉は青々として、山羊には嬉しいご馳走なのだ。初めての場所だと山羊は心細いのかたいていやかましく鳴くのだが、女房が傍にいれば安心するのだろう、おとなしい。

山羊を木につなぐのにはもうひとつ便利なことがあった。

ふだん草原に杭（くい）を打って山羊をつないでいると、日が暮れかけて家に帰りたくなる山羊は、グイ、グイ、と家に向かって鎖を引っ張る。繰り返すと杭はゆるみ、抜けてしまう。山羊は鎖をチャラチャラ、杭をゴンゴン、と盛大に音を立てて引きずりながら道を走って家まで帰る。それを見て犬も吠える。メエメエ、ワンワン、という声を聞いて女房はあわてて家から飛び出て山羊を檻へ押しこむ。気が

つかなかった日は、畑の大根の頭をみな齧（かじ）られてしまった。ひと冬の収穫がパーである。

それに懲（こ）りて翌日は、木製の大きな「かけや」を振り上げ、狙（ねら）いを定め、何度も杭の頭を叩くのだが、なかなか杭の芯に当たらない。杭はねじれ、深く土には埋まらず、あげく杭の頭はささくれる。亭主はやや骨細で、結婚このかた女房より体重が増えたことは半年しかないのだが、さすがに男だけに杭打ちが巧い。かけやを高く振り上げ、一呼吸おいては体重をかけて杭の芯を叩き、杭は順調に土中に沈んでいく。

「コツは左手だよ、マドちゃん。左手の小指を締めると、ぶれないよ」

剣道の竹刀と同じことを言う。

イヤイヤ、なかなかそう簡単にはいかない。

太めの女房は、自分より軽い亭主を見直した。

人が打ちこむ杭に比べ、根が生えている立木は強い。50 キロはあろうかという山羊の馬鹿力にも負けずに立っている。木の根の頑丈さがわかってみると、北海道だとかアメリカ西部だとかの開拓の苦労がしのばれる。根を掘りあげるのは容易なことではなかったろう。

「馬鹿」という漢字は馬と鹿をまちがえた故事からきているというが、その馬鹿力の持ち主がこの山の羊かよ、と女房は、後ろ足で立ち上がり、高いところのつる草の葉をムシャムシャと食っている山羊を眺める。

そういえば、いつぞや上の娘と正倉院展を見に行ったおり、奈良公園の鹿を見たとき、これは茶色い山羊だ、と女房は笑いが出た。鹿は焦げ茶で山羊は白いとはいえ、スゴクよく似ていたのだ。そのほかの違いは鹿のほうが足が細いことと、瞳である。

鹿の瞳はつぶらに丸い。山羊の瞳は横長の楕円である。女房を見ているようでも、焦点があっているのかどうか今ひとつわからない。たぶん肉食動物から逃げねばならない草食動物が、周囲の360度を見渡すためだろうが、細長い顔の両側についているから、正面からは両方の瞳が全部は見えない。どうにも妙な面構えである。



表情も、ほとんど変わらない。

ポーカーフェイス。

ただ、怒っている時は全身から怒りのオーラが出ている。これも女房と亭主にはわかるが、初めて山羊を見た人にはわからないだろう。飼い主にわかるのは、何度も怒った山羊に角で突き刺されているからである。

山羊の2本の角は前を向いていない。斜め後ろに伸びている。初めて見た時はこれで役にたつのか、といぶかったが、生やした張本「人」はちゃんと使い方を知っている。グイと頭を突っこんでおいて一瞬で斜めに頭を振り、角を引っ掛ける、その素早さときたらない。アッと思ったらもう、女房の太ももには20センチほどのみみずばれができて血がにじんでいる。亭主も何度か尻を突き刺された。

困るのは怒りの原因がわからないことである。どうも単に機嫌が悪い時に八つ当たりをされているのではないか。

血が出て痛いのはかなわない。

山羊を売ってくれた農家で、「やられたら必ずやり返しなさいよ。飼い主が誰か、どっちが偉いか教えんと。水をぶっかけるとか、棒で叩くとかせん（しない）と、山羊は調子にのってまたやるからね」と教わった通り、角で突かれた時は女房、山羊の角を両手でつかみ、腰を落として両足を踏ん張り、山羊と押し相撲をする。

しかし山羊は、動きを封じられただけでは負けたと思わない。

しばらくしてもうよかろうと女房が角を放すと、山羊はよけい怒ってすぐにまた頭突きをドシンとくわらせ、角を引っ掛けにくる。ベストなのは、人間が全身の力で山羊をねじ伏せることである。地面にまで座りこませると、山羊もさすがに負けたと思うらしく、もうかかつてはこない。

女房は肩で息をして、座りこんだ山羊を睨（にら）みつける。

山羊飼いは楽ではない。

女房が今切りかけている木は、一度は宅地として整備された土地に生えて大きくなった雑木（ぞうき）である。20年間一度も人の手が入らなければ、雑木の中でも大きいものは幹の直径が20センチを超える。高さも2階の屋根まで届く。隣の家

の中は暗い。

新興団地の住人は、今を去ること十数年前、引っ越してきた家族が全部で 20 軒ほどになったところで自治会をつくった。会費を集めて草刈り機を買いこみ、金属缶の容器を持って、ガソリンと車のオイルの混合燃料をガソリンスタンドまで買いに行き、月に二度草を刈り、後でビールを一緒に飲んだ。その後十数年たって家は増え、畑も増え、空き地はかなり減った。それでもビッシリと篠竹（しのだけ）が密生したところは、草刈り機の刃が鈍る。

手に負えない。

それがどうしたものか、この年はある北向きの 2 区画で、その篠竹が一斉に枯れた。花が咲いたようでもなかったが、根が張りすぎたか。試しに枯れた竹を女房が蹴飛ばしてみると、乾いた音を立てて折れた。

「今年ならこのジャングルを楽にきれいにできる」

女房は決心した。

毎朝山羊を連れ、両手で使う剪定鋏（せんていばさみ）を持って、女房は空地までやってくる。山羊をつなぐと、女房はまず枯れ竹を丹念に蹴飛ばし踏みつけて、少し空間をつくる。常緑樹の葉は山羊がモシャモシャ食う。すごい勢いである。そういえば、羊と山羊との違いは、羊が草専門なのに比べ、山羊は木の葉も好きだという話だった。親戚筋の鹿が植林したての若木の芽を食べて困るという話がよくわかる。

女房は葉がなくなった若木を剪定鋏でチヨキンと低く切る。棘（とげ）だらけで背丈を超す猿捕茨（さるとりいばら）も、山羊が葉を食べた後、棘に気をつけながら女房は根元から切り取る。木通（あけび）や山芋のつるも切る。名前のわからない黄色い愛らしい花をつけるつる草を根元から切ると、根の芯が鮮やかに黄色い。妙な代物だ。

それから、遥か高くまで樹に巻いついたつるを引っ張って切り落とす。時には体重をかけて引っ張ると、枝まで折れてドサリと落ちる。しかし他のつる草に支えられて、どうしても落ちてこない時もある。これはまたあくる日だ。

毎日少しずつ空間が広がる。

翌年もこの空地を山羊の食糧源にすることを考えると、山羊を鎖でつなぐための木を多少残しておいたほうがいい。が、木を残しすぎると、山羊が歩き回るたびに鎖がからまり、山羊の行動半径が狭まるから、木と木の間が2メートルくらいは離れているほうがいい。

女房は梢を見上げ、周りを見渡し、要らない木を決めて鋸（のこぎり）で切る。木を切り倒すという作業には、女房、妙な快感がある。ふだんからきれい好きなわけではなく、家の中の掃除は長いことしていないのだが。

女房は止まらなくなった。

どっちみち他人様の土地である。隣の家の人に頼まれたわけでもない。

何を毎日汗をかいて働いている？

隠れた理由に、女房はまだ気がついていない。

毎日無償奉仕で働いたあげく、とうとう女房は山羊と二人三脚ならぬ一人・一匹六脚で、2区画120坪ほどの下草と低木をみな片づけ、風通しのいい林にしてしまった。「この向こうに家があったのか。今までは鬱蒼（うっそう）と茂った木とつる草で完全に隠れていたのに」と亭主が驚くほど見通しがいい。

今度は3筋離れた南側の2区画のジャングルだ。片手で握りこむ花切り鋏か両手用の剪定鋏、それに鋸の重装備で女房は山羊の鎖を引いて毎朝出勤する。

こっちの林には鳥が運んできた実生（みしょう）の南天（なんてん）が多い。南天は毒だから食わずな、と聞く。が、女房が油断している間に食べてしまったのに、山羊は腹をこわした様子でもなかった。

南天は箸の材料にするではないか。赤飯の上に飾りに置くこともある。南天が毒だと言うのは典型的な迷信だろう。

ホントの毒ならもっとひどいことになっている。

少し前、冬が来て青草がなくなった時、女房は家の裏手の、造園屋さんが刈った

庭木の枝をうず高く積みあげた土地へ山羊を連れて行ったことがある。山羊は常緑樹の葉を少し食べ、止めた。女房はせっかくのいい思いつきに従わない山羊に腹を立て、なおも枝に近寄らせてもう少し食べさせた。

が、翌日。

山羊が吐いている。

今まで見たこともない下痢もしている。

小屋から出ようとしめない。

なんともいえない感じで立ち尽くし、動かない。

目つきはドロ～ン。

夜になっても、いつものように横になっていない。ただ妙な顔をして吐き続け、顎から緑のよだれを垂らし、立ちすくんでいる。

これはおかしい！

毒だ。

女房が食べさせたのが恐らく毒の葉である。

女房はマジであせった。

死ぬな、雪よ。

女房は凍える夜に外へ出て、立ち尽くす山羊の背を撫で、話しかけた。

「雪、ごめんね。毒を食べさせちゃったんだね。ごめん、あたしが悪かった。死なないうで、雪。死なないうで。生きて。雪」

山羊は何も言わず、横にもならず立ったまま動かない。罪悪感にかられた女房は、夜の中に死んでしまわないかと、深夜までさらに二度、暖かい家から出て山羊の雪を撫で、呼びかけた。

翌朝、幸い山羊はまだ生きていた。が、妙な顔で立ったままなのは変わらない。

生気が戻ったのは丸2日後だった。

女房も亭主も心底ホツとし、それからは懲りて、訳のわからない木の葉を食べさ

せるのは止めにした。以前山羊を飼っていた人に聞くと、山の雑木で有毒なのはそんなにないが、庭木にはけっこうあるという。

夾竹桃（きょうちくとう）はダメだよ、と何人かが女房に言った。

「あれは毒。人を呪う時、丑三（うしみ）つ時に人形を釘で打ちつけるって言うだろ、そんな時釘がわりに夾竹桃の木を削って使うんだよ」と。オー、怨念がこもってる。

「それからね、馬酔木（あしび）もいけないよ。字の通り、もっと大きな馬が酔っぱらうくらいだから」。

女房は新知識をシッカリ頭にたたきこんだ。

空き地の中に、ずっと前に枯れた木が、倒れかけて斜めに隣の木の高い枝の又にもたれ、つる草だらけになっている。歩き回るのにひどく邪魔である。女房はつる草をことごとく切り払って山羊に食べさせながら、その枯れ木を動かそうとしてみる。が、重くて無理だ。あれこれやってみた後で、これは「押してもダメなら引いてみな」だと女房は気がついた。傾いた幹の根っこに近いところを抱え上げて、後ろに下がるのである。隣の木の枝別れから枯れ木は離れ、ドウと地面に倒れた。

快感。

12時のサイレンが鳴った。

女房はもう3時間も働いていることになる。

が、この気持ちいい作業を止めて家に帰る気にはなれない。家にいるのは、昼間から飲んだくれていただろう高齢の父親と、学校に行けなくなってしまった中学生の末娘。昼飯を食わせなければいけないのだが。

女房が世話をする責任があるのは、犬と山羊と猫だけではないのである。

1時を過ぎてさすがにくたびれ、山羊をおいて女房は帰った。話のはずまない昼飯の後は昼寝だ。

翌日は、女房の手首ほどの太さにまで育った葛（くず）のつるを鋸で切り離す。

これだけ葛が太ければ、根っこにはさぞかし葛粉の元になる「でんぷん」がたまっているのではないかと思うが、さすがの女房もそこまで手を出す気にはなれない。葛のつるは地を這い、木に登ること数メートルに渡る。女房の体重でもビクともしない丈夫さで、谷川にかける橋につるを使うというのがよくわかる。

この空き地には背の低い笹が茂っている。いよいよ冬になってくると、木の葉もつる草の葉も枯れ果て、落ち尽くして、もはや山羊の口に入るものは、地面の落ち葉か枯れ草、緑ならこの笹しかない。夏の間はロクに食べなかった硬い笹の葉を、冬になれば山羊は食べる。女房は山羊に笹の葉を食べさせた後、茎だけになった笹を剪定鋏で切って回ることにした。ずっと楽である。

空き地にはもう1本、立ち枯れてなお幹の模様から松とわかる木がある。直径は20センチを超えるだろう。

これを倒したいなあ。

両掌を当てて押してみる。

うん？

方向によってはわずかに動く。

よっしゃ、これならいけそー。

女房は幹の周りを歩き、違う方向から木を押すと、揺れる。

押す、揺れる、押す、揺れる、押す、揺れる。

オ、オ、オ、いくぞ、いくぞオ。

オー、倒れた！

地響きがズンと腹に響いた。

イヤイヤ、気持ちいい。

誰か目撃してなかったかしらん、この瞬間？

女房は切り倒した木と頑丈なつるを、隣人が草を刈り払った空き地に片っぱしから引っ張っていくことにした。3メートルからある木を引きずるのには、これまた結構な力がある。何カ月かたって乾いたら、燃やしてやろう。

女房と山羊は2カ月かけて、この2区画140坪ほども、風通しのいい林にしてしまった。

そして気がついてみると、娘は学校に行けるようになっていた。

女房はこの時初めて、どうして自分が開拓作業に情熱を傾けたのかを納得した。

不登校の娘を持つ親の心痛を晴らす場であったのだと。子どもが問題を抱えて前に進めなくなった時、親は手助けをするが、できることには限りがある。西洋の諺（ことわざ）にも「人は馬を水辺に連れて行くことはできるが、水を飲ませることはできない」とあるように、親が子の手を引っ張って歩かせるわけにはいかない。座りこんでいた子ども自身が立ちあがって歩き出すまで、親は待つしかない。

開拓は、その辛抱しかない辛い時期を親が耐えるための作業だったのだ。

そして辛抱は実り、冬は去ったのであった。

山羊がいたおかげで、女房は空き地をきれいにしつつ心痛を和らげることができ、一石二鳥だったと言えるのかもしれない。

「山羊様さま」か。

(十二) 3年目

どういう訳か、この秋は山羊の発情がこない。夏は仔山羊が満5カ月になるまで傍にいて、毎日乳を飲み、女房もセッセと乳を搾ったせいだろうか？ 人間だって、授乳を続けていたら妊娠しにくいと言うではないか。

が、そのわりに雪の腹はしだいに膨れていくのである。

オカシイなあ。

まさか腫瘍とか？

でも元気だし。

夫婦して首をひねっていると、厳寒の2月の夜明け、山羊の雪はただならぬ声をあげ、1時間後、仔山羊を1匹産み落とした。そしてもう1匹。

ウツソオー。

妊娠していたんだ！

病気じゃなかったのはいいけど……。

いったい、父ちゃんはどこ誰よ？

聖母マリアの処女懐胎じゃあるまいし、女房は種つけに連れて行ってない。周りにほかの山羊はいない。

「息子だよ」

あ然として口を開けている女房に、出勤前の亭主が苦い顔で告げた。

「えっ？」

「ほかにいないだろ」

……確かに。

男同士はよく理解できるものか。

あきれ果てた女房は、可愛い筈の仔山羊を抱きに行く気にもならない。餌だけはいつもの牛の配合飼料をたっぷりやった。

まさかマサカの近親相姦。

アイヤー。



そういえば去年9月、手放す前の仔山羊2匹は生後5カ月でかなりデカくなっていた。草を食べさせる屋間はともかく、夕方になって3匹を連れ帰ると、檻は元々1匹用の住まいだけにエラク狭そうだった。

そして雄山羊の太郎はイッチョマエに偉ぶって、生後すぐから妹の花にも母ちゃんにもよく横からや後ろから乗っかっていた。代わりに花がやることもたまにはあった。

亭主も女房も、「これは、犬や猿もやる『俺のほうが偉いんだぞ、コラ、わかってっか』という示威行為で、行為の呼び名はマウンティング（乗っかること、という意味）」とは解していたが、一抹（いちまつ）の不安がないではなかったのである。

だいたい山羊は高いところが好きだから、マウンティングでなくても、上りたがるのは箱の上だけではない。母ちゃんが座ってる背中の上にも、太郎も花も代わるがわる小さな蹄で立ったりするもので、母ちゃん山羊の背中が泥まみれになって可哀そうだった。

まあ人間でも、親は幼な児を背中にまたがらせてお馬さんしてやったり、肩車したり、するけれど。

おもしろいのは、小屋の中で山羊たちがあまり鳴かないことだった。母ちゃん山羊が背中に乗られた仔を嫌がる時は黙って立ちあがり、逃げる。仔山羊のほうを追いかける時も、黙って追いかける。コミュニケーションに鳴き声は使っていないのである。近ければ、動作で意思疎通はできるらしい。鳴くのは、小屋の外で、離れている仔や母を互いに呼ぶ時に限られる。

それにしても、太郎も花も甘えん坊で、延々母ちゃん山羊の乳を吸っていたのである。まさか、その太郎がもう「大人」になってるなんて思わなかった。

頼むから、母ちゃんの乳を吸ってるのに種つけなんてするなよな！

二重にため息が出る。

山羊は繁殖力が強く、沖縄のどこぞの島に、ある人が一つがいの山羊を置き去り

にして、数年たって戻ってみると島中山羊だらけに増えていたという。が、全部それも近親相姦である。

生殖行為は種の保存のための本能であるとされる。女房が十数年前アメリカの短大で「文化人類学」の講義をとった時、人間のセックスは文化であると教授が断言した時、性欲に溢（あふ）れていたであろう若い 50 人の学生は圧倒的なブーイングで応じた。時間がなかったのか、ふだんなら抱腹絶倒の余談も混ぜる教授は切り捨てるように授業を終え、女房も疑問を抱えたまま日本へ帰った。

が、こうして犬猫山羊の交尾を身近に見ていると、確かに、雌の発情期にのみおこる性欲と短時間で終わる交尾を見ていると、動物の場合は性行為が本能であると思う。が、人間の場合では性的結合は愛情に基づくものが多いし、より長時間にわたる。そのうえ同性愛のように生殖に結びつかないものまで含まれる。レイプの目的のひとつには、相手を支配することもあるらしい(どんな目的にしろ許せない)。となると、人間のセックスは教授の言ったように、本能だけではなく文化的な側面が大きいのかと、女房は考えこむ。

女房は山羊を買った農家に電話をしてみた。

「親子でやっちゃうってのは時々あるんですよ。でも、だからって産まれた仔がおかしいってことはあんまなくて、大丈夫みたいですよ」

「ハア、そうなんですか」

「ええ、夏まで待ってもらえりゃ山羊屋さんが長野から来(く)つから、ウチで引き取りますけど」

「イヤ夏になるまで置いてたら、また大人になっちゃって近親交配したらたまない」

「そうですねえ。それなら、貰ってくれる人さいたなら、誰にでもあげっちゃまってかまわねえですよ」

決定。

この仔山羊たちは、ひと月ほどは母ちゃんの乳を吸わせて、2カ月目に入ったら

ソッコー養子に出すぞ！

折しも1年中で一番寒い季節である。吹きすさぶ木枯らしに生まれたての仔山羊が凍えてはいけないと、亭主はプラスチックの波板やら保温シートやら買い足して、小屋の半分ほどを囲いこんだ。

1週間たって、いつものように母山羊を小屋のすぐ外につなぐが、2月では青草がない。それでも、小屋に閉じこめておくのは可哀そうだから、女房は3匹を連れ出す。仔山羊は2匹そろって跳ね回り、母ちゃん山羊が呼ぶのに答えない。姿も見えないと思ったら、枯れ木を積んだ陰で2匹寄り添い、丸くなって平和に眠っていた。

親の心、仔知らず、だねえ。

仔山羊の名前は、2月生まれで雄が「プラム」雌が「梅」と決まった。中学生の末娘はふだん世話は焼かない癖に、命名の時だけは譲らないのである。

どういうわけか、今までになくプラムも梅も人間を嫌う。寄りつかないだけでなく、なんとなく表情に敵意がある。生まれて間もないころ、近親相姦にあきれ果てた女房たちがあまり抱っこしなかったから、今までの仔山羊ほど人間に慣れていないのかもしれない。

おまけに梅はやたらとよく鳴いてやかましい。乳は足りているようだが。

幸い今のところ、2匹とも身体の異常はないようである。母ちゃん山羊は青草がないものだから、多めの配合飼料だけでは足りないのか、あっという間にやせ細ってしまった。

母はツライね。

4月の初めには、夫婦して法事のため山口県の実家まで1週間帰らなければならない。家が空になるこういう時には、犬の散歩と山羊と猫の世話のため、近所の中高生を雇う。欧米式である。子どもの同級生とその親の顔をあれこれ思い比べ、あそこならキチンとやってくれるだろう、というところに、餌の入っている土間の鍵

だけ渡して「1日500円、キッチリやってくれたらボーナス追加するからね」と頼む。

しかしその前に、なんぼなんでも仔山羊はヨソへやってしまわねば。

幸い近所の人と同級生が、梅を貰ってくれると言う。

では雄山羊の貰い手は、生活情報誌で探そう。

以前、犬のジョンに困って、生活情報誌の「もらってください」コーナーに二度掲載してもらったことがある。一度目はともかく、二度目は犬の性生活に興味を抱く変態男から電話がかかってきただけで、女房は腹が立つやらゲンナリするやら、はては人間の奥深さ(?)に首を振るやらであった。

今回、はたして山羊を欲しい人なんているのだろうか？

亭主の予想はゼロである。

女房の予想は、「いるかもしれないじゃん？ やって見ないとわかんないよ」

当たって砕けろのポリシーはいつも通りで、「玉砕」は覚悟のうえである。

結果は、なんと土日計15本の電話がかかるという盛況ぶりだった。

えー、スゴイッ。

ここまで山羊を欲しがるとは！

予想が当たった女房はホクホク顔で亭主に威張りまくる。

草を食べる山羊は新聞やテレビで見かけるから、「環境に優しいエコな除草獣」として流行しているのだろうか。

10本目の電話では、「わたしは63歳で、先年女房に先立たれたあげく、自分にも癌が見つかって落ちこんでいます。山羊でも飼ったら元気が出るんじゃないかと思ってお電話しました。どうかお願いします」なんていう懇請までされて、人生模様のいろいろに触れる機会にもなってしまった。

ともあれ無事にプラムも貰われていき、女房も亭主も喜び安心して実家へ帰った。

ところが、今回は子離れが早すぎたのか、乳が張って痛かったのか、それとも草

場に出してもらえなかったのが不満だったのか、夫婦が留守の1週間、母山羊の雪はずっと鳴いていたという。向かいのオシャレなばあ様が、「可哀そうでねえ、同じ母親としてあたしもわかるよ」とエラク山羊に同情した。

### (十三) 猫の死

姉妹猫のチョコとラッテは24時間家から自由に出入りする。家から犬猫を出さない人はいるが、女房も亭主も、家から出られない猫は牢屋の囚人と同じで可哀そうだと思う。

姉妹は仲がよく、2匹は1年ほどはいつも一緒に寝ていた。大きくなると、1匹ずつ行動する時もあるけれど、時々相棒を探して歩き回りながら鳴く。それを聞きつけるともう1匹はチャンと出てきて、2匹が鼻キスの挨拶をして安心するふうである。なんとも微笑ましい。

猫好きの亭主がただひとつ嫌がるのは、猫のトイレである。猫用トイレは土間に用意してあるのだが、亭主が耕して種を播(ま)いたばかりの畑は猫のトイレにベストの柔らかさらしく、猫はそこにしゃがんで空(くう)を見つめ、沈黙考して用を足し、そして念入りにあたりをひっかいて土をかける。地上に出たばかりの小さなちいさな芽は壊滅する。

それを見ていた、家族でただひとり猫嫌いのじい様が叫んだ。

「あれが、『猫ババ』か！」

大阪弁で「ババ」は婆(ばあ)様ではない。ウンチである。「俺今日ついてへんわ、犬のババ踏んでもうた」などと言う。じい様は大阪に住んだことはないが、ババの意味は知っていた。じい様に言わせると、猫がババを丁寧に隠すことから、「何かを隠して自分のものにする」という意味のネコババという言葉ができたのではないか、と言うのである。

この猫の丁寧さに比べると、犬のジョンは自分のウンチに土をかける仕草はするが、きちんとウンチにかかった試しがない。それどころか、犬の代わりに草や土でウンチを覆っている最中の飼い主に、盛大に土くれをとばす。そして気が済むと、飼い主の動作にかまわず走り出す。

頭が悪い。

もうひとつ家族が納得したのが、「猫またぎ」という言葉だった。まずい魚の意

味である。

猫は、餌が気に入らないと、前足を伸ばして餌皿の向こうの床を何度も搔（か）くことがある。餌を跨（また）いでみせるのである。

あるいは、フン、フンとドライフードの臭いを嗅いでおいて、食べずに姿勢を正して座り、やや甲（かん）高く、ニャン、と一声鳴く。「こんなまずいもの、アタクシいただききませんの」という意思を人間に伝えているのだ。そして缶入りの餌だと、すぐにしゃがみこんで食べる。

チョコに比べてラッテのほうが食べ物の選り好みがきつく、結果、より痩せている。このグルメ根性には感心する。人間ならいくらまずくても、腹が減れば食べるというものではないか!?

犬と比べて格段にグルメの猫は、犬の餌を食わない。犬は猫の餌を喜んで食うが、山羊の餌は残す。山羊は犬の餌を喜んで食う。

結論は、猫、人間、犬、山羊の順でグルメ、ということになる。

猫より食にこだわる人間を、夫婦は知らない。

猫の爪とぎは、同居する人間の悩みの種である。市販の爪とぎよりも壁紙のほうが、爪のひっかかり方が理想的らしく、特に廊下の角は無残にはがされる。猫好きの一家は、家中の壁に腰板を貼ることにした。ペットを飼うのにも、意外なところで金がかかる。

ペットに伴うもうひとつの問題はダニや蚤（ノミ）である。

この家族が昔アメリカに住んでいたころ、ジジと言う仔猫を飼い始めた。手足の先だけが白く、残りは全部ツヤのいい銀色。足も長く、スタイルのいいきれいな猫だった。が、家族と一緒に日本に来たジジは、当時多かった野良犬に間もなく殺されてしまった。生まれ育ったアメリカに野良犬はいなかったから、木に登るとか、狭いところに逃げこむとかいう対処法をジジは知らなかったのだろう。

可哀そうに。

ずっとアメリカにいたら、死なないですんだかもしれないのに。

連れてきたわたしたちが悪かったかしらん。

その悲しみと後悔の念がまだ癒えないうちに、女房の足に大量の虫刺されの痕（あと）ができた。それも足首周辺だけである。もちろんカユイ。首をひねった女房が皮膚科に行くと、「ペット飼ってます？」と聞かれた。

「2週間前までは猫がいましたけど。今はいません」

「じゃ、それですね。猫ノミです。ノミはふだん床にいて、人間が来るとジャンプしてくっつきます。そのジャンプできる高さが20センチまでくらいなんで、人間が刺されるのも足首周辺に限定されるんですよ」

なるほど。

しかし、猫が死んで2週間もたっているのに、ノミだけが生き残っているの？

半信半疑の女房が家に帰って居間のじゅうたんを点検していると、ソファカバーのふくらはぎがあたる部分に、信じられないほど多くのノミがくっついていて、女房は絶叫し、火になって家中丹念に掃除機をかけて回り、ソファカバーも洗濯した。殺虫剤のバルサンも焚（た）いた。

しかし。

その晩亭主が寝ようとしたとたん、目の前で小さなノミが、次々にピョンと跳ねた。

亭主は絶叫し、ノミを1匹1匹捕まえては、かたっぱしから爪でつぶした。

さらには敷布団（しきぶとん）を剥（は）ぎ、目を皿にして畳の上を探し回る。寝るどころの騒ぎではない。

あわてて翌日は畳に差しこむタイプの殺虫剤を買ってきたが、亭主が入念に観察を重ねた結果によると、どうもノミはふだん畳の縁と縁との間に潜（ひそ）んでいて、人が来たとき察すると上に出てくるようだった。蚊やノミには二酸化炭素センサーがついていて、人間の呼気を感じて近寄るという。敵ながらアツパレ。もちろん振動も感知しているだろう。しかし、これでは駆除しきれない。

亭主は毎晩寝る前に30分、ノミ退治に追われるハメになった。

とんだ災難である。

しばらくは亭主も女房も、黒い小さなものはホクロや胡麻（ごま）でさえ、全部



ノミに見えた。

この経験から、女房は新しく格言をつくった。

「虎は死して皮を残し、猫は死してノミを残す」。

こういったトラブルは、ペットを飼う以上仕方がない。

が、それ以上に、なんといっても猫自体の最大の悪癖は、道路で疾走する車の直前を横切ることだろう。運転手はギョッとするし、それを目撃する飼い主も猫の後について飛び出そうになる。何度運転手に頭を下げたかわからない。

そして――

春の朝早く、じい様が新聞をとりに門へ出ると、チョコが門の中で手足を伸ばし、冷たく横たわっていた。

たぶん新聞配達か、朝早く仕事に行く人の車の前を横切り、間に合わずはねられ、なんとか家まで帰ってきて、息絶えたのだ。

半年後、ラッテも同じ運命をたどった。

どうしてこの家の猫は代々みな短命なのだろう？

チョコとラッテの前は、「エウローパ・コムネ（ヨーロッパ普通種）」とイタリアで分類された虎ジマのトラが5年、その前は英語でジンジャーキャット（生姜[しょうが]色の猫）とも呼ばれる薄茶のタマが1年、その前の銀色のジジに至ってはわずか半年、さらにその前の薄茶のミー、マー、ムーも2年足らずで、脱走したり、犬に襲われたり病気にかかったりして亡くなっている。

家中で可愛がっているつもりなのに。

飼い猫が死ぬといつも一晩居間において通夜をし、あくる日家族で庭の片隅に埋めて葬む。

とてもとても悲しい。

命ははかない。

猫がいなくなると、じい様以外はみんなさみしい。

次の猫が飼いたい。

「いや、ちょっと待って」と女房は言った。

すぐ次の猫を飼ったら、前の猫が忘れられるみたいで可哀そうだよ。少し喪に服してやろうよ。

それに、今度の春はお雛様が飾りたいし。

というのも、猫は家の中の小さなもので遊ぶのが大好きで、酒好きのじい様がこっそりコンビニで買ってくる酒がポケットウイスキーだとバレたのは、じい様のベッドの下からラッテが「手」ではじき出して遊んでいた瓶のフタのせいだった。

そんなゴミならまだしも、女房が気に入って実家から持ってきた、風情のある和紙製の雛人形を居間に飾っていたら、猫はその頭をひっこ抜いて弄(もてあそ)び、髪は散々なザンバラ、顔は爪と歯の痕だらけにしてしまった。友人がくれたお手製の日本人形の頭も、同様の無残な姿になった。

となると、ましてや長女が産まれた際に実家から貰った立派な雛人形は、断じて猫の被害にあわせるわけにはいかない。七段飾りの豪華版で、三人官女、五人囃子から隨身(ずいしん)、衛士(えじ)、蒔絵(まきえ)道具までそろっているのだ。以前は客用の和室に七段全部を飾っていたのだが、じい様が来て以来、和室はじい様の寝室兼居室となっている。七段飾りのお雛様は箱から出されなくなった。

だからせめて、お内裏様とお雛様だけでもピアノの上に飾りたいのだが、「猫から守るには特注のガラスケースが必要だろう」と亭主は主張する。そうね、と言いながら女房は面倒がってガラスケースの注文には行かず、数年がたっていた。

「猫がないのはさみしいけど、たまにはお雛様を箱から出してやりたいねえ。それなら猫のいない今年しかないよ。次の猫を飼うのは4月まで待って」

亭主も子どもも女房の主張をのんだ。

#### (十四) 桃ちゃん

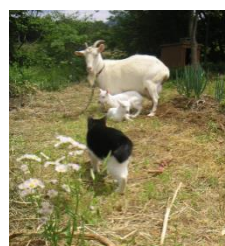
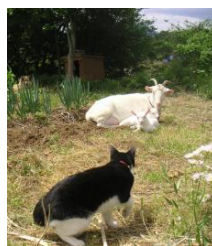
いいねえ、お雛様、きれいだねえ、とひと月楽しんだ後、いつもの生活情報誌の記事を見て、女房と娘が生後3週間の黒白の雌の仔猫をもらってきた。

最初の日、母猫と兄弟から突如引き離された小さなちいさな仔猫は、おずおずとあたりを見渡すばかりでソファから動かなかった。そして桃の花の咲くころ生まれたから「桃」と名づけられ、アツという間に大きくなった。グルメの猫には珍しく、ドライフードのカリカリを「こんなまずいもの、アタクシいただきませんの」と拒否することはない。その結果、代々の猫の中で最大となった。「桃ちゃん」というよりは「桃太郎」である。

そういえばアメリカに住んでいたころ、ペット屋さんで「アメリカの猫は日本の猫よりいっただいに大きいみたいだけど？」と女房が尋ねたことがある。「そりゃたくさん食べているからに決まってるでしょ」と店員は鼻で笑い、そうか、肥満の国アメリカでは、大食らいと太り過ぎは人間だけではないのか、ペットもなのか、と夫婦して感心(?)した覚えがある。

猫と犬を仲よくさせようと、亭主は仔猫のうちに桃を抱いて犬のところへ連れて行った。OKだ。やっぱり猫が小さいうちだと大丈夫なんだね。が、数週間後、もう一度亭主が試すと、犬のジョンは喜んで近づいたが、桃はイチョマエにフーッと怒る。まあいいじゃないの、とご機嫌をとり、犬の鼻面につきつけたとたん、桃は素速く猫パンチをくらわせた。ちゃんと爪を出していたらしく、ジョンはキャンと鳴いてとんで逃げた。

あーあ、失敗。



桃は犬が嫌いだが、山羊は気になるらしい。特に仔山羊は気になって

しかたがない様子である。遠くから眺め、ジワジワと近寄り、そして母山羊が警戒して立ち上がると、近寄

るのを諦める。見ていると、もの言わぬ動物たちの気持ちがわかるようでなかなかおもしろい。

この桃ちゃん、手を使うのが上手である。「『手』じゃないでしょ、『前足』でしょ」と科学的に言うのは次男である。しかし、「手」と言いたくなるほど、ちょいと持ち上げて人間に触る様子が器用である。そして、桃は咬（か）む。やたらと人間の手や顎を咬む。攻撃、というより、口で触ってみる、というか、じゃれているという感じもしないではないが、咬まれる側は痛い。

「しつけよう」と女房は提案した。

「猫をしつけられるわけがない」と亭主は笑った。

「でもあたし咬まれるのイヤ」

女房は桃に咬まれるたび、桃をひつつかんで喉（のど）の奥に指を突っこんだ。猫はゲツといやがる。

そして女房には咬みつかなくなった。

女房は得意である。

亭主は相変わらず抱っこしては咬まれている。

が、ついに堪忍袋の緒が切れた。亭主は桃に咬まれるたびにその頭をひつつかみ、猫の耳を咬んだ。桃はフギャッと鳴く。亭主は口に入った猫の毛をペッペと吐き出す。

変わった亭主である。

しばらくして、動物の販売規制に関する法律の記事が新聞に出た。動物は幼ければ幼いほど可愛いらしくてよく売れるから、売るほうは生後2週間でも3週間でも売りたい。しかし動物愛護団体は、せめて生まれてひと月、できればふた月は親と一緒にいさせねば可哀そうだし、早く親から離すと情緒不安定になる結果、大人になっても咬みつき癖が治らない傾向がある、と反論する。

そうか、桃がウチに来たのは生後3週間、今までの猫の中で一番幼かった。咬みつき癖はそのせいかもしれない。

桃ちゃん、ゴメンね。人間の都合で親から早く離させて。

家を出て大学に行っている長男が、休みで帰ってきた。この長男、小さい時から極めつきの猫好きである。小学校にあがったとたん、田舎のことで学校から3キロ歩いて帰る間に、捨て猫とおぼしき仔猫を見つけるたび、全部、もれなく、連れ帰った。1年3カ月で合計8匹の仔猫を連れて帰ったのである。

一度なぞは小川の向こう側の猫に触りたくて、小川を飛び越すつもりがボチャンと水に落ち、息子は11月の寒い日にパンツまでビショ濡れになった。

それでも懲（こ）りない。

女房が叱っても叱っても、だって可愛いんだもん、と息子は猫を連れ帰る。

ウチでは飼えないよ、と女房はコッソリ捨ててに行く。この時、6歳の長男を頭に4人のわが子がいた。猫は1匹で充分である。このころは生活情報誌に「里親募集中」の記事を出すなんて余裕もまるでなかった。

テキトーな団地を見つけ、女房が車を止めて2匹の仔猫を段ボール箱から出していると、後ろから声がした。

「ここに猫を捨てないでくださいッ」

振り返ると、般若のごとき形相の若い女性が髪を逆立てる勢いで女房を睨みつけている。

ゲッ、あたりに人がいないのを確かめた筈だったが見つかったか、と女房、首をすくめ、平謝りに謝って猫を2匹もう一度車に戻す。なんで息子のためにアタシが叱られなきゃならんのかい、と情けないやら腹が立つやらであった。

その大きくなった猫好き息子に向かって、桃はフーッと歯を剥（む）く。息子が手を出すとひっかく。咬（か）みつく。すぐに息子の腕にはみみずばれができて血がにじんだ。どういうワケか、ここまで桃が攻撃するのはこの長男だけ。ふだん猫は客が嫌いで、人が来ると逃げて出てこないことが多いのだが、桃は妙に人懐（なつ）こくて、フランス人の家族が泊まりに来た時も、ずっと日本語のわからないフランス人小学生の相手をしてくれていた。その桃が、この猫好き息子を嫌う。が、

同じく家を離れている長女が帰ってきた時は、嫌わずに同じ布団で寝た。娘は猫に遠慮してふとんの隅っこに身を縮めて寝ている。

猫の好みはわからない。

桃が来て半年たったころ、家の裏に捨て猫があった。

ヤレヤレ、またか。

女房も亭主も捨て犬・捨て猫にはもう飽き飽きして、とりあう気がない。

ところが11月の氷雨（ひさめ）がシヨボシヨボ降る夜じゅう、裏の小川のほとりから鳴き声が続く、朝になっても小さな姿は動かない。

やかましさに耐えかね、亭主と女房が近づいてみると、生後2カ月ほどの真っ白い仔猫の目が目ヤニでつぶれている。

これでは生きていけまい。

さすがに夫婦は情けを出して連れ帰り、目ヤニを拭いて餌をやった。

白猫は汚れが目立つ。掃除嫌いの女房の趣味には合わず、飼う気はないから、土間から中へは入れてやらない。毎度おなじみ生活情報誌の「里親募集中」コーナーに掲載してもらい、引き取り手が見つかるまでの世話だ。

アァめんどくさい。

哀れな仔猫はろくに餌も食わず、歩き回りもせず、ミャミャア鳴き続ける。

何か障害があるんじゃない？ 女房はいぶかった。

家にあった人間の疲れ目用の目薬を朝晩さしてやるが、いっこうに効かない。目の縁は赤くただれてヒドイご面相である。これではたとえ里親希望者がいても逃げて行く。たまりかねた女房は、着ているフリースの上着のジッパーの中へ小さな猫を突っこんで、神社下の安い獣医へ連れて行った。暖かいところで安心したのか、仔猫はミィとも言わずぐっすり眠ってしまった。

女房が番を待っている間、仔猫は人から見えない。受付をする獣医の女房から「動物はどこでえ？」と聞かれ、女房は黙ってジッパーを下げて見せ、獣医の女房は吹き出した。この人のいい獣医の女房も、毎度捨て犬捨て猫の世話をしている女房のことをよく知っている。

「あんたんとはなあ、周りでもう、犬や猫を捨ててもちゃあんと世話してもらえてって知られてんだよ。だから人がよく捨てていくんだっぺ。そういうところがアッチコッチにあっぺよ」と笑う。それはいいやら悪いやら。

そして幼い犬猫を捨てる元の飼い主を憎む気持ちは女房と同じで、「目ヤニがひどいから、この仔猫捨てられたんだよ」と腹立たしげに言う。

注射と目薬代がたったの1,000円。

この獣医は儲ける気がないらしい。医院の建物も倉庫を改造したというより、まるで倉庫そのもので、医者と患者(?)は狭いコンクリートの床の上を土足で歩く。制服を着た美人の若い受付も、コンピュータも、待合室もないから安上がり、というのもあるようだった。

「こういう猫にはなあ、ものもらい用なんかの化膿止めが入ってるやつなら、人間用の目薬だっていいんだっぺ。でも疲れ目用とか、ドライアイ用じゃ効かないべ」と獣医の先生は笑う。

あくる日にはもう目ヤニは減り、そしてチビ猫は土間から居間へ入る猫用の扉を見つけ、中へ入ることを覚えてしまった。

家の中は暖かい。よく眠る。食欲も増し、活発に動くようになった。

何だ、衰弱していたんだ。

鳴いていたのも、具合が悪かったんだ。

可哀そうにねえ。早く居間まで入れてやればよかったか。

ゴメンね。

チビを捨てた人がほんとに憎たらしい。

しばらくして女房が近所の家へ出かけた帰り、3軒隣の家の庭先に、今世話をしている仔猫そっくりの尻尾の長い白猫がいた。

女房は目を疑った。

チビは家にいた筈だが。

あくる日、犬を散歩に連れ出すと、前日と反対の方向でまた白猫を見かけた。素早く逃げる。

ドッペルゲンガーか？

チビ猫はあの幼さで分身の術を使ったか？

まさか。

2日後、謎が解けた。同時に2匹を見たのである。たぶん、チビの兄弟だ。チビより一回り大きいことを除けば、チビと瓜ふたつだった。

桃はしばらく、この新参者を遠くから眺めるばかりで相手にしようとしなかった。が、チビのほうはまだ母親恋しい年ごろである。巨体の桃にすり寄ってはころがされ、ジャレついてはのしかかられている。そのうち2匹は仲良くなり、見ると、ソファにデンと寝そべる桃の乳をチビがチュウチュウ吸っている。桃は嫌そうだが、そこは年増の貫録、「しょうがないわねえ、このチビ」という顔でほうっている。

まるでマツコデラックス。

3日後、生活情報誌が来た。ちゃんと電話がかかった。話が決まり、待ち合わせの場所に行ってみると、歯が1本抜け、手編みのベストを着た、いかにも人のよさそうなじい様が猫のケージを持って心配げに立っている。

亭主の腕に抱かれたチビを見たたん、じい様はとろけそうな笑顔になった。

「白猫が欲しくてねえ、ずっと探してたんスよ。前いたのが死んじゃって、ウチは今子どもがいないもんだから家ン中がさみしくってねえ、ああよかった」

これ、とクッキー1箱をご丁寧に差しだし、女房が「ハイこれが目ヤニの薬。2、3日は朝晩さしてやってくださいね」と告げるのを、じい様はちゃんと聞いていたかどうか、ずっと暖かい視線をチビからはずさない。

この人なら可愛がってくれるに違いない。亭主も女房も2週間の苦勞が報われたのであった。

帰って桃を抱きあげてみると、乳首が2つ、真っ赤に腫れあがっている。マア痛そう。桃ちゃん、未婚の処女だよね。避妊手術もしたし。それでも母親代わりに乳が出ない乳首を吸わせてやったのね、エライ。

桃ちゃん、御苦勞様でした！



## (十五) アントワネット

犬の吉（きち）に皮膚病があると、亭主が言う。女房が見てみると、腹の右側の毛がまるで抜けてしまい、皮膚が黒ずんで象の皮膚のようにゴワゴワである。よく全身を点検すると、顎の下もだ。

アイヤー。

全然気がつかなかった。ゴメンねえ。

これは獣医に連れて行かねば。

いつもの神社下の獣医は、日中多忙でつかまらない。近所の人に教わった別の獣医はエラク遠かった。

「こうなるまでには、何カ月もかかっていますよ。治るのにも時間かかります」

初老のスマートな女医さんは都会風に標準語でしゃべる。やっぱり茨城でも豚専門の獣医さんとペット専門の獣医さんとは、まるで雰囲気が違う。

「原因は何ですか？」

「ウーン、アレルギーかもしれないし、ホルモンなんかの異常かもしれない。複雑だし、わかりにくいです。原因を確かめるには血液検査で調べないといけないんだけど、保険はないから1回1万円は越すし、薬出して様子見て、また調べて、となると検査も何回かになっちゃいますよね。だから検査はせずに、とりあえず飲み薬と、皮膚を柔らかくするお薬と、薬用シャンプーを出しましょう。飲み薬は3種類、餌に混ぜてそれぞれ朝晩と朝1回やってください。それからこれで毎週2回全身をシャンプーして10分くらいそのままおいといてからゆすいで、柔軟剤はその後ペチペチつけてください」

「え、シャンプーを毎週2回？ ステロイドなんかでパッと治すってわけにはいかないんですか？」

「犬は舐（な）めちゃうからステロイドは使えないんですよ」

「あの、ラップみたいなのを首の周りにつけて、舐められないようにするのは？」

「ああ、あれはかなり犬にストレスがかかるんで、よっぽどでないと思いたくな

いんです」

「週2回もシャンプーして薬つけるなんて、私にできるかなあ」

「それは飼い主さんしだいですけどね。だいたい飼い主さんが一番嫌がるのが室内犬の下痢なんかで、お部屋汚れるでしょ。それに比べると外飼いの動物の皮膚病なんかは、そういえば搔（か）いてたかな、くらいで」

女房、耳が痛い。

まさに、そういえば搔いてたかな、の口である。

「体臭がするんですけど、それも皮膚病のせいですか？」

「え、それはたぶん耳にダニがいるんです。ちょっと見てみましょう。……これはたぶんまちがないですね。耳のあたり、搔いてませんでした？」

「あ……そういえば……たぶん……搔いてました……ハイ」

「じゃ別にお薬出しますね。毎日塗ってやってください」

吉ちゃんゴメンね、長いこと気がつかないで、と無精な女房は謝りながらも、シャンプーは2週間で3回がせいぜいである。

2週間たってもう一度連れて行くと、女医さんは念入りに吉の全身を見た。

「おなかの皮膚は、ずいぶんよくなりましたね。ゴワゴワじゃなくなってる。でも、全身にまだ湿疹がある」

女房、反省したわりには湿疹があったなんて全然気がついていない。

「え？ 湿疹？ どれですか？」

「ほら、ここと、そこと、ほかにもここ。毛が抜けてたのは一部だけど、これは全身の病気ですよ」

アイヤー。

知らなかった。

ゴメン、吉ちゃん、シャンプーの時も老眼鏡かけてよく観察しよう。

1カ月間女房が根気よくシャンプーと薬を続けると、吉の皮膚はずっと柔らかくなって色が薄くなり、まばらに毛も生えてきた。

やっとオーケーである。

長かったあー。

だいたい吉は洋犬の血が入っているらしく眼がパッチリとして、やや毛が長い。どういわけか、特に尻尾と、後ろ足の腿の後ろの方がやけに長く、20センチはある。走り回っていると、フワン、フワン、と派手に揺れる。

女房はそれを見るたび、子どものころ読んだ『三銃士』の挿(さし)絵にあった、近衛兵(このえへい)や貴婦人の帽子についた羽飾りを思い出す。

「吉」なんて純和風な名じゃなくて、アントワネットとか、シャルlotteとか、マリー・クレールとか、舌を噛みそうなフランス名にしてやればよかったと思う。中世ヨーロッパの華やかな宮廷の香りがするではないか。

女房、イタリアに住んだ最後の年は城巡りをしていた。山間部の質実剛健で城塞型の城と、平野部の豪華絢爛で邸宅型の城の2通りがあった。中世に冷暖房はなく、化学繊維の軽くて暖かい服もなく、電灯やガスコンロ、電子レンジもなく、さぞかし不便だったろうと思うが、女房、そのころ流行(はや)った言い方をすれば中世ヨーロッパに「萌え」なのである。

でも飼犬に長ったらしい名前をつけても、結局省略形の「アン」とか「シャルちゃん」になってしまうだろう。亭主の親戚の犬が「セバ」と呼ばれていて、「洗馬？」と思ったら本名セバスチャンの略だった。なんだか本名と通称とのイメージがてんで違うんですけど。

で、もう1匹の柴犬雑種のジョンは、カタカナ名前よりも、純日本風で男らしい「平蔵」とか「辰(たつ)」とかの名前のほうが、ホントはふさわしいよね。

亭主も女房も時代劇作家の池波正太郎の大ファンである。火付け盗賊改め長谷川平蔵は夫婦のヒーローなのだ。「辰」は平蔵が若い時分かなりヤンチャしていたころの呼び名である。

吉の長い毛は、杉の葉っぱやゴミをくっつける最良の箒(ほうき)である。羽飾りはいいが、ゴミは貧乏くさい。女房はこの際、と吉の毛を短く散髪してやった。貧乏くさい。女房はこの際、と吉の毛を短く散髪してやった。



人相ならぬ犬相がまるで変って、長毛雑種洋犬が、テディベアのぬいぐるみのような可愛らしい顔になってしまった。散歩に連れて行くと、近所の人が、アラ、違う犬よね、前の犬どうしたの？ と聞く。

同じ犬なんですけど。

別人ならぬ別犬。

そして冬になって動物はみんな冬毛になった。吉はまた毛が伸びて、ものすごく厚い「毛皮のコート」を着て暖かそうである。体重はジョンの4分の3しかないのに、「着ぶくれ」でジョンより大きく見える。たぶん祖先は北国の出身だろう。山羊も毛が伸び、一回り大きく、強そうに見える。

お向かいのオシャレなばあ様の兄さんが飼っている、という犬はずいぶん賢くて、主人の言うことをよくきくそう。「おすわり」をさせて餌を置いても、主人が食べていいと言うまではずっとおすわりのまま待ってんのよ、とばあ様が得意げに話す。

よし、ならばジョンもしつけてやろう、と、女房が餌をおいて待たせても、ジョンはいつも通りにすぐ食べようとする。そこで女房が餌をとりあげ、「まだよ、おすわり」と言ってもう一度おすわりをさせて待たせると、ジョンもまたすぐ食べようと尻をあげる。「ダメ、まだいって言ってないでしょ」と女房は再度餌をとりあげる。三度繰り返すと、ジョンは立ったままヨソを向いた。「やってらんねーよ」という顔をしている。

すねたのだ。

そーかそーか、急にヨソの犬の真似をさせよーって無理だよねえ。はい、食べな、と女房は餌皿を置く。おまえはおまえだよねえ。

散歩へ出ると、相変わらずジョンはよく引っ張る。もの好きな夫婦の家へ来て4年目だから、もう7歳の立



派な中年オヤジなのだが、心は永遠の少年である。

春になると新緑が美しい。一番散歩が楽しい時期でもある。女房は思わず一句ひねった。

新緑に誘われ知らず遠歩き

ウン、これは珍しくよくできた。

## (十六) 猫の扉

大きなペットセンターに行くと、犬猫専用の小さな枠付きの扉を売っている。大きさが3種類あり、それぞれ大型犬、中型犬、小型犬兼猫用である。家の壁や扉の、ここと決めたところを割（く）り抜き、枠をはめこむ。枠の上の部分には蝶番（ちようつがい）がついていて、透明な扉は押されるとパタンと開いた後でパタンと閉じ、犬や猫だけが通り抜けられる。

通称「パタパタ」（この家だけの通称かもしれないが）。

女房の父親が同居に来た時、家を建て増したついでに、台所の勝手口の向こうを3畳ほどの土間にした。今時の家で土間があるところは少ない。が、鍬（くわ）や剪定鋏（せんていばさみ）、野良着や雨合羽（あまがっぱ）などの庭仕事用品だけでなく、収穫したじゃが芋や箱買いの缶ビール、大量に買った林檎（りんご）、自家製の白菜漬、さらにはストーブ用の石油缶を保管するのに、低温の土間はきわめて便利である。

この夫婦の家では、それまで猫の餌皿とトイレを玄関の土間の隅に置いていた。

十数年前のある日、家族で出かけようとする、歩き始めたばかりの次男が玄関の土間に猫と並んでしゃがんでいた。女房が次男の名を呼ぶと、振り返った口がモグモグ動き、頬には猫の餌がくっついていて、息子は大好きな「ニャンニャン」のドライフードと一緒に食べていたのである。

夫婦はあれま、と吹き出したが、その後次男は腹をこわしたようでもなかったのほうっておいた。その時1歳の次男の上には3歳の長女と5歳の長男がいたうえに、女房の腹の中には次女がいた。少しぐらいのことでオタオタしていた日には、とても毎日子育てをしていける状況ではなかったのだ。

が、その後はさすがに、子どもの目の前では猫に餌をやらないようにした。

その次男ももう大きくなったが、猫用スペースは表口の玄関より裏口の土間のほうがいい。

それに、猫は家の外と中をなるべく自由に行き来させたい。猫派の夫婦としては、猫の自由は大切なものだったから。

建て増しをする大工さんに頼んで、土間と台所の間の壁と、土間と外との間の壁の2カ所に猫用のパタパタ扉をつけてもらう。年配の棟梁も猫の扉は生まれて初めて見たらしく、無言でしばらくの間目をパチパチさせていたが、チャンと上手につけてくれた。

猫の扉の枠の下にはダイヤル式の留め具がついていて、扉が、「中からだけ開く」、「外からだけ開く」、「どちらからも開かない」、「どちらからも開く」のどれかに設定できる。さらにこの留め具は乾電池につながっていて、閉まっている時でも磁石に反応して開く仕掛けである。磁石は猫の首輪につける。つまり、ウチの猫だけ出入り自由で、ヨソの猫は入れない。

なんて賢い仕掛け！

こんな器用なものをつくるのは日本の会社かと思ったら、表示はすべて英語で、輸入物だった。そういえばアメリカでもイタリアでも、夫婦は友人の家の居間でシェパード級の大型犬を見かけることがあった。家中土足で歩く習慣だと、犬を中に入れるのにも抵抗が少ないんだろう。それに伝統的な牧畜社会だと、羊の世話をす犬（シェパード）が家族の身近に暮らしていたんだろうね。

この家の代々の猫は、教えるとじきにパタパタ扉の仕組みを覚えた。

夫婦は、わりに性質がおとなしい雌猫を飼うことにしている。しかし、「性質がおとなしい」ということは、「弱っちい」ということでもある。イタリアで飼っていたトラなんぞは、近所のベルギー人が飼っていたミルコという老猫が来ると、イチョマエに背中の中毛を立ててフーッとうなりながらも、1歩、2歩、と後ろに下がっていた。

うなるか、後ずさりするか、どっちか一方にしてよ！

そのほかの代々の猫も例外なく気が弱い。

初代のミー、マー、ムーから始まって、ジジも、タマも、トラも、そしてラッテ

とチョコ、現在の桃に至るまで、みんな弱っちい。気の強いヨソの猫が侵入して自分の餌を食べるのを、黙って傍に座って見ている。迫力負けしたか、実力行使で負けた後か。

「あんた情けないわね、あんたのごはんが眼の前で食べられてんのよ？ 追い出しなさいよ」と夫婦が猫の首をつかまえて説教を垂れてもムダである。

でも、この猫の扉さえあれば、無敵。

もう大丈夫！

確かに、1年ほどは大丈夫だった。

が、猫の扉の箱型乾電池は数カ月で切れ、かがんで取り換えるのがけっこう面倒である。おまけに、喧嘩に負けて逃げてきた、この家の猫の尻尾のすぐ後ろにヨソの猫がくっついて追っかけてきた場合は、ヨソの猫も一緒に猫の扉をくぐり抜けてしまう。

マメではない夫婦は、猫の扉を中からだけ開くようにし、乾電池と磁石の仕掛けを諦めた。

猫が入りたい時はニャンと鳴くから居間のガラス戸から入れてやる。

が、ある日、女房は目を疑った。

ついさっきまで外にいた筈の桃が、音もなく中にいるではないか。

一度なら見まちがいかと首をひねって終わりだが、数度続いた。

ひと月ほどたつうち、とうとう女房は、桃が外から猫の扉の端にカリカリと爪をかけ、器用に開けて頭を突っこんで入る姿を目撃した。

猫は「手」を使う、犬は使わない、とは動物博士のムツゴロウ、畑正憲さんも言っている。

「桃ちゃん、器用ねえ、お利口」と亭主は桃を抱き上げて褒めてやる。

「これであんただけ自由に入出力できる」

しかし、猫は「手を使う」だけでなく、「他の猫の行動を見て学習する」動物で



もあることが判明した。

ただしこの場合は、桃ではない別の猫である。

朝女房が台所へ降りてみると、亭主が「梅の花」と呼ぶ猫の足跡が流しの縁に点々とついている。次男の弁当用にと皿に入れてフタをしておいた焼肉や、鍋の中の筑前煮の残りまでもが見事に消えている。

桃はふだん流しには上がらないから、これは別の盗人猫の仕業（しわざ）だ。

前から桃の餌を食べていた、「薄茶の縞（しま）模様でまん丸の短い尻尾にタマ2つくっつけた」雄猫がある朝屋根裏の3階から降りてきて、起きたばかりの亭主と鉢合わせし、双方仰天した。

コイツめ。

その結果、よくできた仕掛けの筈の猫の扉は締め切られ、桃はガラス戸の傍で鳴いては出入りすることとなった。

なかなか万能の仕掛けはない。

亭主は桃の「両手」を持って、「さあ猫背を直しましょう」と言いながら、一緒に腹筋運動をしている。

猫が人間に飼われるにも、それなりの苦労があるというものだ。



(十七) 山羊は酒を飲むか？ 飲んだら酔うか？

亭主がある年、果実酒に凝（こ）った。庭のブルーベリーとまたたび、拾ってきた花梨（かりん）、買ってきた梅の4種類を焼酎に漬け、その瓶を棚に並べてまずは数カ月見て楽しみ、次に飲んで楽しんだ。

一番旨いのは評判通り花梨、次にまたたび、それから定番の梅、しかしブルーベリーは少し甘過ぎる、という。

またたびは亭主がホームセンターで苗を買ってきて金網沿いに植えたものである。女房はまたたびなる植物が、普通の直立する木だと思っていたが、実際はつる性であった。こんなものを売っていたら見逃さずに買ってきて植えるところが、この亭主のもの好きなところである。

またたびの実には梅の半分くらいの大きさでまん丸。かなりの数の実がつるにつき、酒に漬けるには充分であった。

猫にまたたび、と言う。

猫の餌や爪とぎ用の板を買うと、時々「マタタビ粉」という小袋が一緒についている。

一度、試してみた。

居間の爪とぎ用の板にマタタビ粉末をふりかけ、猫を連れてくる。

猫は臭いを嗅（か）ぎ、しばらくすると今まで聞いたことのない声を出して鳴き始めた。ニャオーン、ニャオウウ、と鳴いては、床に背中をつけて寝そべり、空をひっかくように両手両足を動かし、体をよじる。

またニャオ〜ンと長く声を伸ばして鳴き、体をくねらせる様子は実に色っぽく、亭主と女房はその奇態に手を打って笑いころげた。

あの、「猫がまたたびで酔う」というのは本当なのだ。

だから亭主がまたたび酒を漬けこんだ時、女房は亭主がまたたび酒を飲んだら、同じように奇声を発して体をくねらせるのか、と興味津々（しんしん）であったが、さすがにそれはおこらなかった。猫ではない亭主は淡々とまたたび酒を飲み、ご満

悦であった。

あんまり果実酒が美味だったもので、亭主は2匹目の泥鰻（どじょう）を狙い、残ったまたたびにもう一度焼酎を足した。が、当然のことながら、エキスが染み出てしまったカスを漬けても旨い酒にはならない。

「これどうするの？」

「まずい。捨てる」

「もったいなくない？」

「でも旨くないよ。俺は飲まない」

「じゃ山羊にやってみる？」

「は？」

山羊はクズ野菜から果物の皮、果ては消費期限切れの菓子まで、飼い主や隣人が「おやつ」にくれるものなら、喜んで食べる。

が、果実酒はかなりアルコール臭がする。

はたして山羊が酒を飲むだろうか？

夫婦は山羊の餌皿に、一度漬けた後のまたたびカスの混じった焼酎を入れた。

山羊は臭いを嗅いだが気にならなかったようで、まずアルコールの染みたまたたびを次から次へと器用に歯でつまんで食べた。またたびがなくなると唇をすぼませて酒を飲み、最後は隅々まで皿を舐めまわした。美味だったとみえる。

そういえば、自然界でも時々果実が熟し過ぎると自然に発酵することがあるそう。動物はそれを食べたり飲んだりするらしく、猿酒というのを聞いたこともあるから、山羊酒もあるのかもしれない。

いや、まさか。

亭主と女房が感心して眺めていると、10分後、なんだか山羊の目つきがトロンとしている。鼻から口のあたりがふだんより赤い。鼻の穴も膨らんでいる。

「見て見て、あれ、酔っぱらってるんだよ！」

亭主と女房は笑いころげた。

「すんごくマヌケな顔！」

「あんな顔ふだん見たことない！」

「山羊も酒を飲むし、飲んだら酔っぱらうんだねえ」

「酔っぱらったヤギのこの幸せそうなマヌケ面は、酔っ払った時のお父さんと一緒！」

「それはお義父さんに失礼じゃないか？」

「でも事実じゃん!？」

「……フッフッフ」



(十八) 吉(きち)の夜泣き

暑い夏のことさら暑い夜、犬の吉が鳴く。

ハテ、どうして吉が？

元々この家の犬どもは、人間にはたとえ初対面でも吠えずに尻尾を振って歓迎して、およそ番犬にはならないが、よその犬が通りかかると「俺の領域内に入ってくるな」とやかましく吠える。ことに雄のジョンがよく吠えるが、雌の吉はわりにおとなしい。

そのおとなしいハズの吉が、深夜になってから延々と鳴く。それもキャン、キャンと「泣く」ようである。

これは、黙って我慢しきれない異常が、何かあるということだ。

可哀そうに。

どこか痛いのか？

それともダニか何かで痒(かゆ)いのか？

この2匹は外飼いで、小屋の周りは草だらけ。散歩に行く先は芝畑と畔(あぜ)道、その周りは藪(やぶ)とあって、ダニが喰いつくには最適の環境である。

女房は犬を飼い始めるまで、ダニという悪名高い生き物の姿を見たことがなかった。血を吸ってまん丸に膨れるとダニは小豆(あずき)ほどの大きさになるが、血を吸う前は胡麻(ごま)粒ほどの小ささである。色は灰色がかった茶色。

子どものころ家に犬がいたという亭主に教えてもらって初めて、女房はこれが「あの」ダニかと知った。が、それを素手で引っ張って取るなんて、最初は気味悪くてとてもできなかった。怖いもの知らずのこの女房だって、何でも初めから平気だったわけではない。

しかし「ダニのように一度喰いついたら離れない」という言葉通り、女房が軍手をはめた手で恐るおそる引っ張ったくらいでは、ダニは取れない。エイヤと犬の皮膚ごとむしり取るくらいの覚悟が必要である。

女房がダニを素手でむしりにとってつぶすという「勇気」あるいは「鈍感力」(?)を得るまでには、数カ月かかった。

環境が環境だけに、犬のダニを全滅させるのは容易なことではない。

犬小屋の周りの草を亭主が草刈り機で刈っても刈っても、すぐ草は伸びる。

2匹の犬が夏になるとしょっちゅう後ろ足で体を搔き、時には自分の尻尾のあたりに噛みついているのは、ダニで痒い証拠である。

ウー、これはほうっておけないよね。

女房は毎朝散歩のたびに立ち止まって丹念に2匹の犬のダニを取る。

ダニも命がかかっているから、取られにくい場所をよく承知していて、犬の腋(わき)の下あたりに密集している。冷静に考えると四つ足の犬に「腋」があるかと思うが、前足のつけ根のあたりは多少足を持ち上げさせなければ人間に見えないから、犬のダニ取りをしたことのある人ならたぶんみな、「犬の腋の下」という言葉に納得するだろう。

女房が不思議なのは、「犬は草藪(やぶ)でダニを拾ってくる」という定説からすると、犬に喰いつくまで、肉食のダニは草藪で何を食って生きているのか、ということである。

誰かこの謎を解いてください。

亭主はスポイト式の殺虫剤を買ってきて2匹の犬の首の後ろにつける。能書きには全身に効くとあるが、どう見てもダニの数が減ったようではない。

毎週末に2匹の犬をダニ取りシャンプーで洗い、そのついでに亭主と女房のふたりがかりでダニを取る。亭主は片手で首輪をつかんで犬を固定し、嫌がれば叱りつけ、もう片手でダニを取る。いっぽう女房は「腋の下」から腹の下、尻尾まで丹念に毛を搔き分けてダニを取り、バケツの中のシャンプー混じりの水につけて殺す。

この時ジョンから取れたダニの数は、なんと約100匹。

ハア。

なんとまあ。

さぞ痒かったろうねえ。

さすがにその次の週からは、ダニの数が順調に減っていった。

しかし、なかなか全滅には至らない。

そのうち、マダニが媒介するウイルスで人が死んだというニュースが出た。

ゲゲッ。

マダニってこの犬のダニだよ。あたしらもそのうち熱出して死ぬるんかしらん？

でも、女房にはダニに喰いつかれた記憶がない。

亭主も「あんたダニに喰われた記憶ある？」と聞かれて首を振る。

「うーん、まだよくわかってないんだよね、マダニのウイルスがどうして人間に移ったか。ダニの血経路かねえ。ま、どっちみち人間、一度は死ぬんだし、今心配しても始まらないよ」研究者の亭主は冷静である。

「うん。そうだね」。能天気な女房もすぐに納得した。

吉はジョンと違っておとなしいからあまり抵抗せずにダニを取らせる。その年は、ジョンにやたらとダニがついていたわりに、吉にはさほどついていなかった。が、吉は皮膚病になったことがあるように、アレルギーの気（け）がある。散歩の時に立ち止まってボリボリ搔いている回数は、ジョンより吉のほうがよほど多いのである。女房と同じ「痒がり」、つまり他の人や犬より痒みを強く感じる体質だろう。搔きむしってあちこち血まで出ているのも女房と同じである。

ウーん、ちょっと可哀そう。

痛いのもいけないけど、痒いのもツライものだ。女房にはよくわかる。

だから、吉の夜泣きは、ひょっとして痒いせいではあるまいか？

ただ、なぜ昼間は泣かないのに夜、それも深夜にだけ泣くのがわからない。

夜中に女房が吉のところに行っても、暗くてダニは取れない。せいぜい「どうしたの、吉？ いい子、いい子、泣かないで」と撫でてやるのが関の山である。次の

晩は疲れていた女房が大学生の柔道部の次男に頼んだところ、なんと吉の前足を持ってブンブン振り回したと言う。

「エ、振り回すなんて、そ、それはないんじゃない？」

「ほいじゃが、泣き止んだで」

「……もうあんたには頼まん」

毎日女房は散歩の際にダニを探して取り、週末にはまた夫婦してシャンプーとダニ取り、スポット式殺虫剤を繰り返す。が、それだけ努力しても、吉の夜泣きは週に三度ほどの割合で続く。

こういう時は「犬が人間の言葉をしゃべってくれたら」と亭主も女房もつくづく思う。どこがどう悪いか説明してくれたら、すぐどうにかしてやれるのにねえ。

夜泣きは近所迷惑でもある。

たまりかねた女房は獣医に連れて行った。神社下の低料金の獣医は若いのに脳卒中で急死してしまったから、一番近いとは言え、なじみのないところである。

「犬の夜泣き？」

ニキビ跡の残る若い獣医の目は点になり、口はポカンと開いた。

自分の耳を疑った様子である。

「犬が夜泣きして困るって言うんですか。何が原因ですか」

「それがわからないから教えてもらいに来ただけど」

「飼い主さんにわからないものが僕にわかるわけはありません」

「……あなた動物専門の医者でしょ」

「確かに僕は獣医です。そりゃね、犬も高齢になると認知症になって夜泣きすることあります。だけどこの子はまだそんな齢じゃないです。……アノ、こんな高齢じゃない犬が夜泣きするってのは、イヤ、全然、僕は聞いたことありません」

困った医者は棚から専門書を出してめくり始めたが、「夜泣きについて書いてはありません」。

なんとまあ、頼りにならない青二才だこと。

これじゃせつかく来た甲斐（かい）がないじゃないの。



ともあれ医者は真剣に犬の全身を診察し、ダニに咬まれた痕はさほどひどくない、と断言した。

「じゃ、どうしたらいいのよ？」

「それです、対症療法しかないと思います。鎮静剤を試してみますか？」

やっと女房と意見が一致した。

女房も眠り薬をのませるしかない、と思っていたのである。

早くそう言えばよかった。

「ただし、鎮静剤は効き過ぎるとコワイです。犬が永久に目覚めないこともないとは言えないので、どうしても夜泣きを止めない時だけ、必ず少量で始めてください。それで効かなかった時は、もう一度だけはのませてもいいのですが、それ以上はダメです」と真顔で医者は告げた。

のませ始めるのが、夜泣きがどうしても止まらず 1 時間続いた後の 12 時、それでも泣き止まずに二度目にのませるのが 1 時。

泣く犬は可哀そうだが、飼い主も寝不足になる。

そのうちに夏は去り、吉の夜泣きは終わった。

終わってみれば、その夏は 100 年に一度という記録的な猛暑だった。

地球温暖化の影響が犬の夏バテから夜泣きにまで至ったのかどうか、原因は未だに謎のままである。

女房はほぼ毎日、亭主は会社勤めのない週末、犬と 30 分ほど散歩に出る。

女房によると、散歩の効用はふたつある。

ひとつは運動で、「中年のメタボ防止にウォーキング」と言うが、ただ健康にいいからというだけでは、とても毎日続けられるものではない。「風邪をひいた」、「疲れてる」、「今日は雨」、「今日は寒い」と、いくらでもサボる理由はつけられる。が、犬がいてはトイレのためもあり、毎日ガンバッテ散歩に出ざるを得ない。

中高年の皆さん、健康のために犬を飼いましょう。

最近、女房は若い時分からの低血圧がひどくなった。上が 90 で下が 60 という血圧は、太目で短気、かつパワフルな女房におよそ似つかわしくないが、事実である。先日のメタボ検診での血圧はさらに低く、上が 80 に下が 50 だった。

しかし、上には上がいるもので、かかりつけの医者は「僕なんかもっと低いですよ」と言う。

「先生が？ いくつくらい？」

「この間の暑かった夏、ダルイなあ、と思ったら上が 70 に下が 40」

そういえばこの先生はいつも気だるげで、ボソボソと話す。患者の話によく耳を傾け、よく説明もしてくれるところがいいのだが、「それで先生よく生きていますね」という言葉を女房はかろうじてのみこんだ。

低血圧がひどくなると同時に、女房は若いころからの冷え症もひどくなった。冬は靴下を昼も夜も 2 枚はき、夏も夜だけは靴下をはかないと眠れない。10 月から 4 月まではスカートがはけない。

5 月になってやっと長めのスカートをはいて、柄にもなく女房がシャナリシャナリと歩いていると、スカートがサラサラと足にまつわるたび、「女してる」という感じがする。気分がいい。

女房だって一応は女である。

体が冷えるということは、体が作り出す熱量が減っているということで、中高年になると筋肉量が減って基礎代謝が減るのだ、と新聞に載っていた。日常的なカロリー消費量の 3 分の 1 は、体温維持に使われているという。つまり、女房のように冷え症の人間は、冷え症でない人間よりも日常的なカロリー消費が少ないわけで、その分（たぶん）太りやすい。

踏んだり蹴ったりである。

運動すると一時的であれ、体は温もり、血圧は上がる。

が、歩いている際、主に使っているのは足である。しかし、女房が太いのは上半身、特に胴体で、「じゃが芋にマッチ棒刺したような」体型である。

だから女房は犬と芝畑に出ると、人気がないのを幸い、腕を左右に振り回してウエストをひねりながら歩く。仕事で凝った肩と背中をほぐすためには、正拳（せいけん）突きの真似をしては肘（ひじ）を目一杯後ろに引く。果てはコンサートに行った若いもんがライトを振り回すように、両腕を上には伸ばして左右に振ったりしている。他人が見たらマチガイなく笑える光景だと思うが、たぶん、見ている人はいない（ということにしている）。

効果あって、ウエストは10年前に比べて5センチくらい細くなった（と思う）。腕も背中も（たぶん）痩せた。

止められませんね。この散歩。

犬との散歩のふたつ目の効用、いや楽しみは、自然の美しさである。

秋に色づく烏瓜（からすうり）の実、露草（つゆくさ）の群生、夏の夜に咲いて朝にはしぼむ、白いレースかフリンジのついたような不思議な烏瓜の花、芝生に輪をかいて生える茸（きのこ）。

どれも都会では見られないでしょ？

あ、ということは散歩の効用というだけじゃなくて、田舎に住む効用でもあるわね。

肥満に悩む皆さん、田舎に住んで犬を飼いましょう！





(十九) アナフィラキシー

女房が書斎にこもって仕事をしていると、蛙の合唱が始まった。窓の外を見ると、いつものまにか静かに雨が降り始めている。

反対に雨の降り終わりは鳥たちが知らせてくれる。雨に降りこめられて我慢していた鳥たちが、一斉におしゃべりを始めるのだろう。3日続きの雨があがった朝は、犬の散歩に出ると左右の林でいろいろな鳥がそれまでにないほど声高に合唱し、女房は一句ひねった。

雨上がり 雲雀（ひばり）鶯（うぐいす）ほととぎす

ウン、五七五にはなっているが、事実を羅列しただけだ。いい句なら鳴き声が聞こえてくる感じがする筈なのに、まるで聞こえてこない。

どうも女房に俳句の才能はなさそうである。

年によって、よく鳴く鳥、今ひとつ鳴き声を聞かない鳥がある。

山羊を飼い始めて3年目だったか、不如帰（ほととぎす）がやけによく鳴いた。

ほととぎすは百人一首にも「ほととぎす 鳴きつるかたを眺むれば ただ有明の月ぞ残れる」と詠（よ）まれ、平安朝の貴族には人気のある鳥であつたらしい。が、夫婦が感じるころでは、鳴き声そのものはけたたましく、ちよいと優雅さに欠ける。なぜ人気があつたんだろう、といぶかると、昔かたぎで古典の素養のある女房の父親が「初夏到来の象徴ではないか」と言う。

確かに2週間ほどよく鳴いたが、暑くなるにつれてパタリと聞かなくなった。

蛙と鳥がよく鳴くのは春から夏にかけてで、秋になると蛙も鳥も静かになる。代わってにぎやかなのは虫。特に夜は家全体がリンリーンという美しい音に包まれ、夫婦は幸せな気分になる。

犬の散歩に広い芝畑を歩くと、8月は薄青い塩辛トンボがスイスイと飛び、下旬にな

ると赤くなる前の赤トンボ（アキアカネ）が増える。亭主の肩先や女房の特大の麦わら帽にまで止まるのが愛らしい。

そして大量の地蜂（じばち）。かなりの大きさに女房はちょっとギョッとするが、襲われたことはない。芝畑の地面に、人の親指ほどの穴が点々と開いているから、そこから出てきたのか、夜はそこで寝るのか。

田舎では蜂は珍しくない。雀蜂（すずめばち）だってブーンと大きな音を立てて飛んでいるが、こっちから手を出さない限り、そんなに攻撃してくるものではない。

しかし、時には刺されることがある。この夏夫婦は犬のダニ取りにかまけてつつい草取りを怠り、花壇が草茫茫（ぼうぼう）になった。女房はまた一句ひねった。

草の海 底に眠れる花壇かな

これはなかなかいいんじゃない？ どう？

俳句はともかく、たまりかねた亭主が思い切って日曜に草を引いていたところ、草に埋もれたミニ薔薇の枝に蜂が巣をつくっていた。気づかなかったのが亭主の不運、蜂は襲われたと思って反撃し、亭主は半袖半パンのむき出しの手足を6カ所、アツという間に刺された。生き物に詳しい亭主の鑑別では、小足長蜂（こあしながばち）。

亭主の叫び声に驚いた女房は、「とりあえずシャワーを浴びたら」と勧めた。その後ソファに座っている亭主の様子が、なんとも言えずおかしい。ボーッとしている。

「あんた、どう？」

「息、が、しに、くい……」

これはヤバイ、と女房はすぐ電話をかけて、25分ほど離れた救急病院が開いているのを確かめ、車を出した。この田舎では救急車を呼ぶより自分で車を走らせるほうが早いのだ。運転席から横目で眺めると、亭主、常になくボーッとしたままである。病院につくと、アナフィラキシーだと言われた。中枢神経に毒が回り、呼吸困難をおこしていたのだ。ゾツとしたが、2時間ほど点滴を受けてよくなれば帰宅可能、よくならなければ一晩泊まることになると言われた。

幸い、4時間ほどでよくなった。

その後、もっとアブナイ話を聞いた。

近所の縦も横もデカイ亭主が、夜中の2時ごろ、ウワッと声をあげ、「百足（ムカデ）に頸動脈を刺された！」と飛び起きたという。その女房、半信半疑でこれもすぐ車を出した。車の中で亭主はしだいに呼吸が苦しくなり、病院に着いた時には目の前が真っ暗、つまり目が見えなくなっていたという。

「あんた、もうこれは死ぬんじゃないかって思ったんじゃない？」と後で本人に聞くと

「思ったねえ」

「よかったねえ、死ななくて」

「ホントだよ。百足に刺されて死ぬなんて冗談じゃない」

そこの女房が言うには、病院で夜明けが近づいたので「一度亭主を置いて帰って子どもたちの朝食の支度をしてきます」と告げたら、「困ります、気管切開するかもしれない。家族の許可が要ります」と言われた。彼女は平然と「何でもしてください、お任せします」と家に帰った。

すると台所で室内犬が座りこんで、デカイ百足とニラメッコしていた。即、彼女はビール瓶の底で粉々に叩きつぶした。

斜め向かいのこの女房、手八丁口八丁の有名なやり手である。

「葬式でき、ムカデに刺されて死にました、なんて言ってもたぶん誰も本気にしてくれないよねえ。『言いたくない理由がほかにあるんじゃない？ ホントは自殺なんじゃない？』なんて陰口叩かれるよね」

「あんたの旦那、まちがっても自殺するようなタマじゃないじゃん？」

「そりゃそうだけど。あの人はずごく丈夫でねえ、結婚して20年以上、医者にかかったことなんてなかったのよ。それが初めてかかったのがムカデだってさ、マッタク」

この話を都会のマンション暮らしの人に言うと、まず理解してもらえない。一軒家ではけっこう地面から虫が上がってくるものなのだが。そう言うと、「でもそれって、か

なりの田舎でしょ？」と聞き返される。

実のところ、田舎で家に上がってくるのは虫だけではない。

ある日、掃除嫌いの女房もたまにはトイレを掃除するか、とトイレブラシを持ち上げると、その下に小さな蛇が丸くなっていた。女房もさすがに「オー」と声をあげて一瞬固まり、いい理由になったと掃除は諦めて、そのままトイレブラシを蛇の上に戻した。

夕飯時にその話をすると、高校生の次女がイヤな顔をした。

「あたし、さっきトイレ行ったのよ。その時蛇、いたのね」

「いつからいたかわかんないよ。10日前からいたのかもしれない」

「ヤメテよ。ねえ、父さん、取ってよ」

「俺は知らないよ」。仕事からくたびれて帰っていいところに酒を飲んでいる亭主は、眠気も手伝って「我関せず」を決めこむ。

「じゃオレか」と大学生の次男が鼻をうごめかした。「じゃが、毒蛇じゃなからうなあ」

女房は毒蛇かどうか見分けがつかない。

「ねえ、あんた、何もしないでいいから、鑑別だけしてよ」と亭主をせっつく。亭主は「エエ？ めんどくさい。大丈夫だよ。ウン、ダーイジョーブ」と相手にしなかったが、拝み倒され、いやいやトイレへ向かった。そして、蛇を見るなり大声をあげた。

「蝮（まむし）じゃないかこれは！」

一瞬で酔いも眠気もふっとび、眼をランランと光らせた亭主は大股で土間へと火バサミを取りにいった。

「ちょっと待って。あたし蝮って知らないのよ、この際教えて」

「ほら、普通の蛇は胴体と頭が同じ大きさだけど、これは頭のほうが胴体より大きいだろう。これが蝮だよ。人によっちゃ頭が三角だって言う。こいつは毒がある」と言うなり亭主は火バサミで蝮をつまんで玄関から出、派手な音を立てて何度も蝮をタイルに叩きつけた。

「いったいどこから入ったんだろう？」

全員黙りこんだ。ド田舎とはいえ、家は新建材にアルミサッシの今風のつくりである。



「猫ちゃう？ 桃ちゃん。ほかに考えられないよ」

これに答えてそういえば、と次女が言う。「この間ここで朝ごはん食べてたら、家中でわたしに向かって鳩が一直線に飛んできたわ。あれには心底たまげた。桃ちゃんが捕まえてきたんだよね」

女房もその鳩はよく覚えている。2階で娘の絶叫を聞き、ドスドスと階段を鳴らして駆け降りると、細っこい娘が、もう一度鳩を狙（ねら）う猫を左足で押さえ、鳩をかばうため椅子を右足で押さえて、セーラー服の両足をおもいきり踏ん張っていた。

今まで猫が燕（つばめ）だの雀（すずめ）だのを捕まえてきたことは何度もあったが、鳩ほどの大物はなかった。

鳥だけではない。進学して家を出た長女の机の引き出しの下には、手足を非対称に伸ばした蛙（かえる）のミイラもいる。捨てるにはつまみ上げなければならず、「そんな恐ろしいこと」をするくらいなら、長女は蛙が「いないことにして」そのままほうっておいたのだ。

長女は鳥だの鼠（ねずみ）だの死骸を自分の部屋で見つかるたび、まず盛大に金切り声をあげ、次に猫をふん捕まえてものすごい勢いで説教を垂れていた。女房から見れば、猫にはその「説教」が「賞賛」と感じられ、長女に褒めて欲しくて毎回長女の部屋に獲物を置いていたのではないか、と思われるほどだった。

「しかし、よく桃は蝮に咬まれなかったな」と亭主が首をかしげる。

「そうだねえ。桃ちゃん、上手に蛇の頭の後ろでも咬んだんちゃう？ それにしてもなんでトイレ？」

「蝮のほうが涼しい物陰探して入りこんだんじゃない？」

話は尽きず、にぎやかな夏の晩であった。

(二十) 雪ちゃん、バイバイ

山羊の雪が来て5年がたった。今年も6月に2匹の仔山羊を産み落とし、向かいのオシャレなばあ様は毎日見にきては、ニヤケている。

「可愛いねえ。何といっても可愛いねえ。雄、雌、どっち？」

「やっと見分け方がわかったよ」と女房が笑う。

仔山羊を持ち上げて腹を見せ、

「これが臍の緒、そのすぐ下のポタンのようなでっぱりがオチンチンだから、今年は2匹とも雄だわ」

「あら、珍しいね。ずっと雄雌両方だったのに」

「そうねえ、確率からいえば2匹とも雄ってのは4分の1だけど」

「この仔たち、オッパイ飲むの下手だよ。あたし毎日来てさ、あんたたちイッチョマエに立って歩いてるけど、オッパイ飲むのは下手だね、って笑ってやんの」

「このお母ちゃん山羊さ、元々右のお乳の出が少し悪いみたいなのよ。最初の年に1匹しか生まれなかった仔山羊が吸いつき悪くてさ、ずうっと左のお乳ばかり吸ってたんだわ。今年はそのせいか右のお乳に乳がたまっちゃってるもんで、乳首自体もバカでかくなって仔山羊の口には大き過ぎるの。おまけに乳首の位置がエラク低いもんだから、なかなか仔山羊の口には届かない。おかげでこの仔らこっちを全然吸わないのよ。困ったもんだわ」

赤ん坊に乳をやったことのある女ならみんな経験があるだろうが、乳が張ると痛い。ほうっておくと乳腺炎までおきることがある。母山羊の雪の右の乳はパンパンに張って左の乳の倍ほどの大きさになっている。

お節介な女房、これは自分が助っ人にならねば、と意を決した。

女房は母山羊のはれ上がった右の乳を握る。山羊は痛がって逃げる。ならばと女房は山羊を檻（おり）に押しつけて逃げられないようにし、左手で乳を握りながら、右手で仔山羊の片足を引っ張ってきた。仔山羊の口に巨大な乳首を押しつけ、乳を搾（しぼ）る。仔山羊はつかまれているのから逃げようとするのに一生懸命で、飲むことにまで気

が回らない。乳はタラタラと地面に垂れ続ける。

女房はため息をつき、仔山羊を引っ張ってくるのは止めにした。傍に座りこんでいる仔山羊に向けて、乳を飛ばす。仔山羊はたまげてペロリと舐めた。

ホラ、お乳あるよ。おいで。

仔山羊はプルンと耳を振るばかり。

女房は諦めて小鍋に乳を搾り、山羊小屋の隅に置いた。仔山羊は知らん顔で、そのうち鍋の乳には草や泥が混じってしまった。この乳は犬にやった。犬は大喜び。

翌日。

女房はまた挑戦する。

檻の中で1匹の仔山羊が左の乳を吸い、もう1匹の仔山羊も乳が飲みたいのだが、右の乳も吸えることを知らず、ウロウロしている。

今だ、と女房は後ろから左腕で母山羊の尻を抱きかかえて動きを封じ、右手を伸ばして巨大な乳首を握った。仔山羊の目の前に乳が筋をひいて落ちる。仔山羊は口を開けた。乳首の先に吸いつく。女房はすかさず右手で乳を搾り続け、仔山羊はのどを鳴らして飲み続ける。

二、三度繰り返すと、乳首は中の乳がなくなって小さくなり、仔山羊の口の大きさにふさわしくなった。乳全体もしぼんで乳首の位置が高くなったから、吸いつきやすい。

どうやら仔山羊は右の乳も飲めることを覚えたようである。

やったね。

女房は腰を伸ばしてニンマリと笑った。

いつも2匹の仔山羊を見分けるのはなかなか難しいのだが、今年はどうも大きさが少し違うようである。

去年は生まれたての1匹が片足を引きずっていた。

3年前お産の一部始終を見届けた際、仔山羊をポトンと「産み落とす」瞬間を見ていたから、あれではどこか痛めても不思議はなかろう、と思ったものだが、その時の仔山羊は無事だった。去年と今年、仔山羊の1匹が足を捻挫したようである。向かいのば

あ様も心配して、「お腹の中にいる時からじゃないよね、お産の時だよ。じきに治るよね？」と眉をひそめて毎日見に来る。10日ほどたって、どちらの仔山羊が足を傷めていたかわからなくなった時には、しみじみ喜んでいた。

仔山羊は誰が見ても可愛いから、見に来る人はたくさんいる。中でも小さい子を連れてた母親やばあ様がよく来る。

近所に女房とほぼ同じ歳で、子どもを6人産んだ強者（つわもの）がいる。上の子は早くも結婚して出産し、歩き始めたサー君を連れてきては近所を散歩したり、若きババに守りをさせたりする。夕方は婿（むこ）も合流してご飯を食べ、一緒に帰っていく。

「今日もサー君、ママと雪ちゃんのところ行って赤ちゃん見てきたんだよね」とババが婿に言う。

「へえ、おまえ、ママ友できてよかったなあ」と婿の顔がほころぶ。

「え？ ママ友？」

「は？ 違うのか？ 雪ちゃんって『人』も最近赤ちゃん産んだんだろ。おまえ、育児の話とかもしてるんじゃないのか？」

婿とサー君以外の全員が一斉に爆笑した。

山羊がママ友かい！

「やだァ、雪ちゃんってのはヤギだよオ。人間じゃないよオ」

婿も顔を真っ赤にして笑いながら、雪ちゃん、って名前を言うからてっきり人間だと思っじゃないか、まさかヤギがこんな団地にいるなんて思わないよ、としきりに弁解した。

柴犬雑種のジョンは御年9歳になった。3歳で来たころに比べると、散歩の時にあっちこっちヘグイと引っ張る度合いも減った。

「こいつも白髪（しらが）がでてきたよね。歳だ」

週末に夫婦で犬の散歩に出て、リードを引っ張る犬2匹を後ろから見ながら亭主が言う。

「え、犬に白髪なんて出るの？ 犬には髪ないじゃん」

「髪はないけど全身に毛が生えてるから一緒だよ。ほら、首の後ろが白いだろ」

「アラ、そういえば前は全部薄茶で白いところなんかなかったっけ。あんたよく見て  
るねえ」

亭主は元々理学部の生物系の出身である。生物学は観察から始まる。常に観察の結果  
仮説を導き、検証する。

純粋文系で元文学少女の女房は、この、今まで知らなかった「仮説」を検証するため、  
近所の高齢犬ウララちゃんの飼い主に聞いてみた。

「え、白髪？ うん、この子なんか顔が真っ白になったよね。もう 13 歳だもの」

これで科学的に「実証」されたかどうかはともかく、実例をもうひとつ知って、女房  
は納得した。

そうか、犬も毛の色素が抜けるのか。

じゃあ、歳とってハゲル犬もいるのかな？

雌犬は雄犬に比べてハゲにくいのかな？

人間のこの亭主はハゲないが白髪がかなり増えた。女房は 40 代からめっきり髪のリ  
ュームが減って、そのうち部分かつらかしらん、と鏡を眺める日々で、白髪だのハゲ  
だのは他人事ではない。

ジョンとの距離がぐっと近くなったように感じるひと時である。

今時山羊を飼っているという家は珍しいので、人から人へとけっこう噂（うわさ）が  
広がるらしく、毎年のように「仔山羊が雌なら分けてくれないか」と知らない人から申  
し出がある。亭主はそれを聞いて「もの好きがいるもんだ」と笑うが、「現在飼ってる  
自分のもの好きは何なんだろう」と女房はクスクス笑っている。

今年も申し出があった。しかも、「雄でもいいから」「母ちゃん山羊が要らなくなった  
らそれでもいいから」というほどの筋金入りのもの好きである。隣町の新聞屋さんだっ  
た。

仔山羊をあげると連絡して来てもらい、実際に顔を見て話をしてみると、この男、筋  
金入りも筋金入り、亭主や女房とは比べものにならない、まさに究極のもの好きであっ

た。

「俺にとって山羊は家畜ではないなあ、ペットだなあ。仔山羊は可愛いからね、ピンクにしてみたいと俺思ったのよ」

女房の目は点になった。

女房と亭主は、山羊は家畜であってペットにはならない、という結論にすでに達している。

「で考えてね、食紅だと思ったのよ。奥さん食紅って知ってる？」

「うちにあるよ。クリスマスケーキのクリームに使ったことある」

「そうそう。食紅なら人間が食べてもいいつつうくらいだから仔山羊にも安全っしょう。それでね、いろいろやってみてね、わかったの。まず、仔山羊の全身を濡らす。それでパッパッてあちこち食紅ふりかけてね、手で撫でると全部ピンクになるのよ」

女房、口があんぐりと開いてきた。

「仕上げにもう一度背骨に沿って食紅かけて、濃くすんの。いやあ、可愛いよ」

動くぬいぐるみかい。

「そしたらね、道行く人が喜んで携帯で写真撮ってくんだわ。俺それ見てるのが楽しくってさ」

女房はたまらず笑いころげたが、ズボン吊りをつけ、黒縁の大きな眼鏡をかけた男は大マジメ。あきれ果てた女房はついでに言った。

「じゃ、もう1匹は黄色にしたら？ お菓子作り売り場に行けば食紅と並んで黄色も売ってるよ。沢庵（たくあん）に入れるやつ。ピンクと黄色、可愛いじゃん」

「いんやあ、そこまでは俺も考えなかったなあ」

そのピンクの山羊を、女房の隣のサラリーマンが見たことがあると言う。

隣のしっかり者の母親が話すには、「息子はすんごくビックリしてね、『真っ赤な山羊だ。ウソだ』って言ったの。そしたら一緒の車に乗ってた人がね、『ホラ、人間だって赤ん坊って言うくらいだから、仔山羊も生まれたては赤いんだ』って言うんだって。それもあんまり自信持って言うから、息子は『ひょっとしてそうなのかなあと思った』ってわたしに言うのよ。でもわたし、お宅の山羊が生まれた時から見てるけど、真っ白よ

ねえ」

あたりまえだ。

この日、もの好き男のとどめは山羊の移動方法だった。仔山羊をバイクに乗せて連れて行くと言うのである。女房はまさかと思ったが、男が乗ってきたバイクの荷台にくくりつけられた、野菜を出荷する時に使う頑丈なプラスチック格子の箱は、確かに生後ひと月の仔山羊が入らない大きさではなかった。しかし身動きできない窮屈さで、上から自転車のチューブで押さえつけられた仔山羊は嫌がって大声で鳴きわめく。それを聞いて母山羊まで、息子に一大事と大声で鳴く。仔山羊が去って 30 分ほどは、残されたもう 1 匹の仔山羊と母親の合唱が続いた。

もう 1 匹の仔山羊は、例年通り種つけ代に、女房がトラックに載せて連れて行った。これはもっと平和的な移動である。

この前の年、女房は医薬関連の技術翻訳の仕事をしていていた。

そうになると、毎日が忙しい。

翻訳は、注文に応じて製作・納品する他の仕事と同様に納期厳守である。約束した納期に遅れるということは、「もうこの先お仕事は要りません」というに等しい。最後は徹夜してでも納期に間に合わせなければならない。中年に徹夜はこたえる。それを防ぐには、計画を立ててその日その日のノルマを確実にこなしていくしかない。そして低品質の訳文を納品したら次の仕事がなくなるのは目に見えているから、手も抜けない。日に最低 8 時間は働く必要がある。

女房は毎日山羊にかかる手間と時間が惜しくなった。

そろそろ山羊飼いをおしまいにしようか？

5 年間、もう充分遊んだよね。

団地はあっちもこっちも開拓してきれいになったし、乳を搾ってチーズもヨーグルトもつくってみて、どっちも美味だった。

山羊の雪にとっても、普通なら山羊小屋から 1 歩も出られないまま配合飼料で一生を

過ごすのに比べれば、太陽を浴びて自然の草やつる草、木の葉が思う存分食べられて、いい人生ならぬ「山羊生」だったのじゃないかしらん？

「そんなこと、他の『山羊生』を知らない雪にわかるわけがないじゃないか」と亭主は笑う。

いっぽう、ちょうどそのころ、山羊の世話が大変なことから、女房と亭主との間には山羊を飼い始めた責任のなすり合いが始まっていた。

「あんたが飼おう、って言って探してきたんだよ」とビールを片手に亭主が口を尖らせると、

「あんたが、仔山羊は可愛いだろうねえ、飼ってみたいねえ、って言ったんじゃない」と女房も応戦する。

「まさか、あんたがホントに山羊を見つけてくるとは夢にも思わなかったんだよ」と、しみじみ亭主が語る言葉に女房が思い当たるのは、イタリア暮らしの間、「あなたみたいな人は見たことがない」と散々外国人からも日本人からも女房は言われ、その理由が「並々ならぬ実行力」だったことである。

そうか、フツーの人はたとえ山羊を飼おうかと思っても、思うだけで実行しないのか。だけどわたしはアッサリ実行しちゃったワケね。

さらに、この5年の間に女房が亭主を「観察」していてわかったのは、亭主はテレビでペンギンがペタペタ歩くのを見れば「可愛いねエ。一緒に散歩したいねエ。アア飼ってみたい」と叫び、ライオンの赤ん坊を見れば、「可愛いねエ。抱っこしたい！ 飼ってみたいねエ」とニンマリ目尻を下げて言うことであつた。

あくまで「飼ってみたい」であって「ホントに飼いたい」ではなかったのである。

それに乗った女房がバカだった。

つくづく女房は反省している。

女房には姉がいる。大学で知り合った専業農家の長男と結婚してみかん農家に嫁（とつ）いだ。その家は昔、みかんだけでは長男の学資が出ない、と豚を飼い始め、一時は



20匹ほどの母豚と3匹の種豚、そしてそこで産ませた200匹以上の仔豚を飼っていた。

「あんたねえ、生き物を飼うってのはタイヘンなことだよ。空地の草なんて、山羊に食べさせるより草刈り機で刈る方がよっぽど楽だよ」

姉のその言葉が身にしみる。

しかし、山羊飼いを終わりにするといっても、雪をどうするのか？

今まで飼っていた猫は、死ぬたびに庭に埋めて家族一同手を合わせて拝んでいたが、山羊を埋めるにはバカでかい穴を掘らねばならず、だいたい雪はまだ死んでいない。女房に山羊肉を食べてみたいという好奇心がまったくないわけではないが、この生きている雪を殺すような可哀そうなことは、断じて、できない。

誰か代わりに飼ってくれる人がいればいいのだが。

でも、そんな奇抜な人、いるかなあ？

そうだ、あの、ものすごく変わり者の新聞販売店主は、「母ちゃん山羊でも引き取るよ」と言っていたではないか。

彼に貰ってもらおう！

新聞屋さんは電話ひとつで快諾し、軽自動車で行ってきた。その軽自動車に山羊を乗せて帰るという。

どうやって？ と目を剥(む)く女房に、新聞屋さんは平然と軽自動車の中を指さし、ホラ、後ろのシートをはずしてあるっしょう、手製の檻(おり)が見えるっしょう、と説明する。「これは牧場と家との山羊移動用専門に使ってんのよ」。

確かに前部座席のすぐ後ろにはベニヤ板製の柱らしきものが何本か見える。女房が山羊の綱を引いて軽自動車の後ろの扉を開けて入り、反対側の扉から出て綱を引くと、山羊はおとなしく軽自動車に乗った。すかさずふたりに両方の扉を閉める。山羊が軽自動車に乗っているとは信じがたい光景だが、事実だった。

が、それからが大事(おおごと)だった。廃車寸前のポンコツ車は、バッテリーがあがってエンジンがかからない。新聞屋さんは承知していて準備よく発動機を助手席に積んでいた。

発動機、ねえ。

「奥さん、大丈夫。俺、できるから」

しかし、紐を引いても引いても発動機は動き始めない。30分後、女房がウチの車とバッテリーケーブルで接続しようか、と提案すると、新聞屋さんはすなおにうなずいた。バッテリーは動き始め、山羊は軽自動車の後部におとなしく収まって去っていった。

女房は感心して首を振り振り見送った。

この少し後、亭主は通りすがりに新聞販売店の横で赤と青の2匹の仔山羊を見て、車の中でひとり笑った。女房は赤と黄色を勧めたが、新聞屋さんは黄色ではなく青を選んだのだ。たぶん何人もが携帯で写真を撮っていったことだろう。

そして半年後――

夫婦はとんでもないニュースを聞いた。

あの新聞販売店の建物が火事で全焼したというのである。人の被害はなかったらしいが、山羊の被害があったかなかったかまでは聞こえてこない。

雪の運命は不明のままであった。

が、確かあの新聞屋さんは、「牧場」が別のところにあるような話をしていたはずだ。

「雪ちゃん生きてるかねえ？」

「生きてるといいねえ」

「いっぺん会いに行ってみたいねえ。ウチらのこと覚えてるかねえ？」

「どうだろう。でもせんべい持ってったら、前足を踏み踏みするんじゃないか？ そうしたら覚えてたってことだよ」

さらに2年後、同居に来ていた女房の父親は、やっぱり故郷がいいと山口県へ帰っていった。この父親は男やもめになったとたんに顎（あご）ひげをはやし始め、周囲の家族や友人は誰も褒めなかったが本人はご満悦で、しばらくすると立派な山羊ひげとなった。女房はこの山羊ひげを生やした父親と、本物の山羊ひげを生やした山羊とを並べて写真を撮りたいものだとずっと思っていたが、言いだせないままに父親は去ってしまっ

た。

つくづく残念である。

次女も進学して家を出、かつては7人、あるいは5人と6匹いた大家族も、3人と3匹に減って静かになった。

代わりに、ひとり暮らしが不自由になってきた亭主の母親が同居に来た。亭主が定年退職したら、亭主と女房は亭主の実家を継ぐために山口県へと引っ越す予定である。実家には田畑と多少の山林がある。亭主の父親が亡くなって母親が体調を崩して以来、畑は耕作放棄地となって草を刈るものはおらず、亭主は帰省するたびに大汗をかいて草刈りに追われている。

「山口でもそのうち山羊を飼うかねえ？」

「世話がタイヘンだよ」

「でも、まちがいなくよく草を食べてくれるよ」

近くの親戚に話すと、「そりゃいい。ウチにも貸してくれ」と大歓迎である。

実際に飼うかどうかは、さあ、その時のお楽しみ……。

